ISSN 0286-5424

京都府埋蔵文化財情報

第 74号

下植野南遺跡の発掘調査 ---------- 藤井　整 -- 1
律令期の土器製塩遺跡における鍛冶遺構 ---------- 田代　弘・水野　聡哉 -- 5
近畿地方北部における古墳成立期の墳墓(1) ---------- 野島　永・野々口陽子 -- 19
平成11年度発掘調査略報 ---------- 33
33. 赤坂今井墳丘墓　37. 東山遺跡
34. 吉沢城跡　38. 算用田遺跡
35. 五十河遺跡　39. 稲葉遺跡第5次
36. 福知山城跡　40. 三山木遺跡
府内遺跡紹介　86. 広沢古墳 ---------- 43
長岡京跡調査だより・71 ---------- 45
センターの動向 ---------- 47
受贈図書一覧 ---------- 49

1999年12月

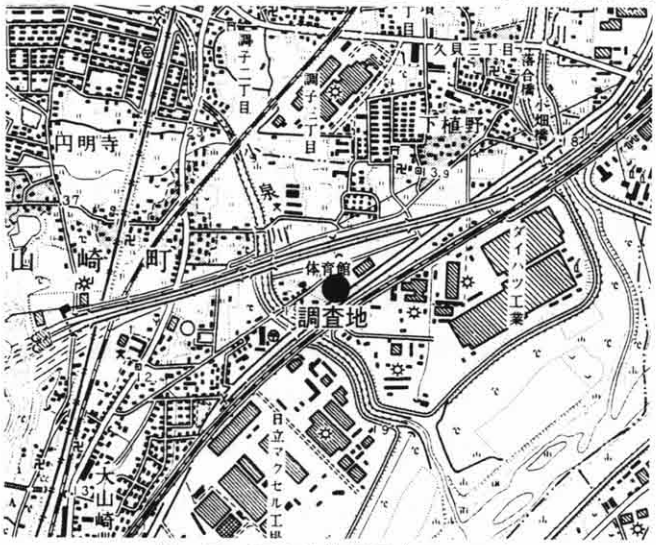
財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

下植野南遺跡の発掘調査

藤井　整

1．はじめに

下植野南遺跡は桂川の右岸にあり、その支流である小畑川と小泉川に挟まれた沖積低地に位置する。地理的には長岡京跡の最南端にあたるが、今回の調査地は、長岡京跡から少し南に外れた格好となっている。下植野南遺跡ではこれまでの調査によって、縄文時代から中近世までの遺構が知られており、昨年度は20基近い弥生時代の方形周溝墓が検出されて話題を呼んだ。現在、遺跡の範囲内では、日本道路公団によって大山崎ジャンクションの建設が進められており、今回の調査はその建設に先立って行われたものである。



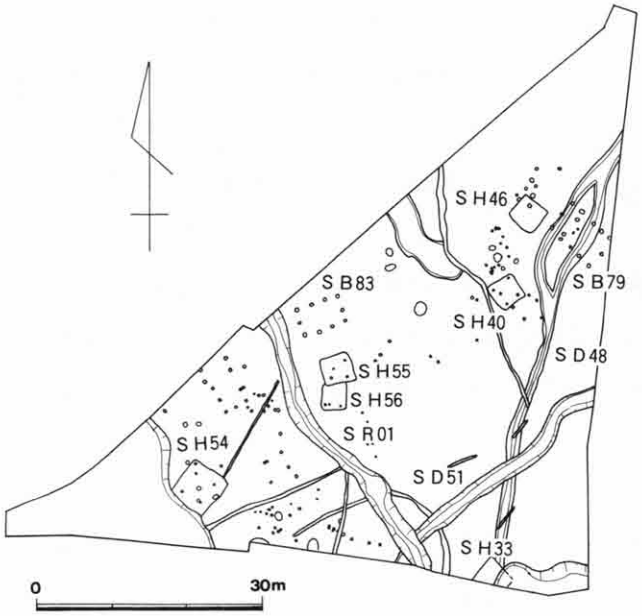
第１図　調査地位置図(1/25,000)

2．今年度調査の成果

今年度の調査でも、縄文時代晩期から中世にかけての遺物が出土した。遺構として確認できたのは、このうち弥生時代中期から古墳時代後期にかけてのものである。

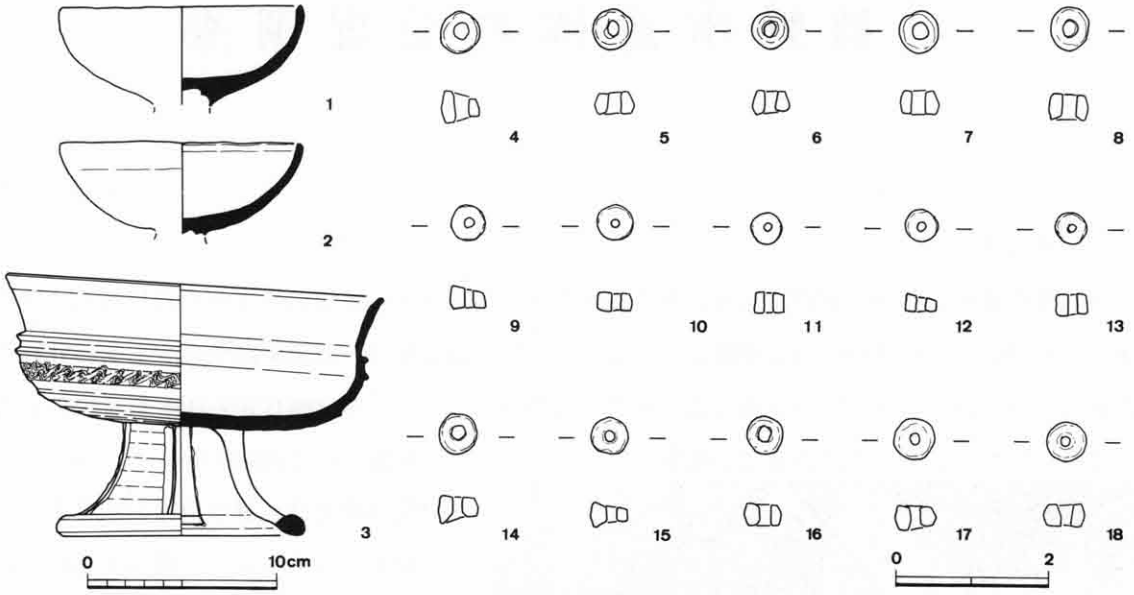
①古墳時代の遺構

古墳時代後期の遺構としては、掘立柱建物跡３棟、竪穴式住居跡５基と溝を検出した。昨年度と比較すると住居跡の数は少なく、すでに集落域の中心からはやや外れているようである。

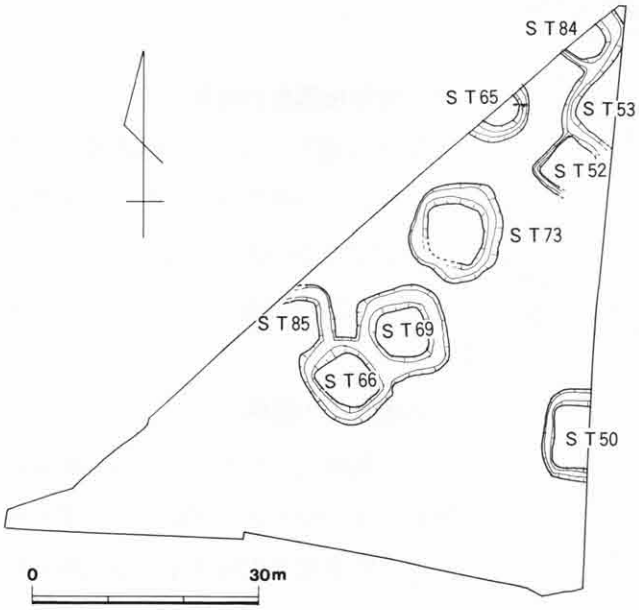


第２図　古墳時代遺構面　遺構配置図

竈を持つ竪穴式住居跡ＳＨ33は、一辺約4.5mの住居跡であるが、南東隅はすでに削平されており、南西角は調査区外である。住居跡の上半部分も削平をうけており、10cm程度を検出したのみであるが、現在までに40個以上の臼玉と小玉が出土している。これらは住居跡埋土の洗浄によって出土したものであるが、玉の



第３図　下植野南遺跡出土遺物(1)



第４図　弥生時代遺構面　遺構配置図

９割以上が住居跡を16分割したうちの北東角の１区画から集中して出土しており、大変興味深い。

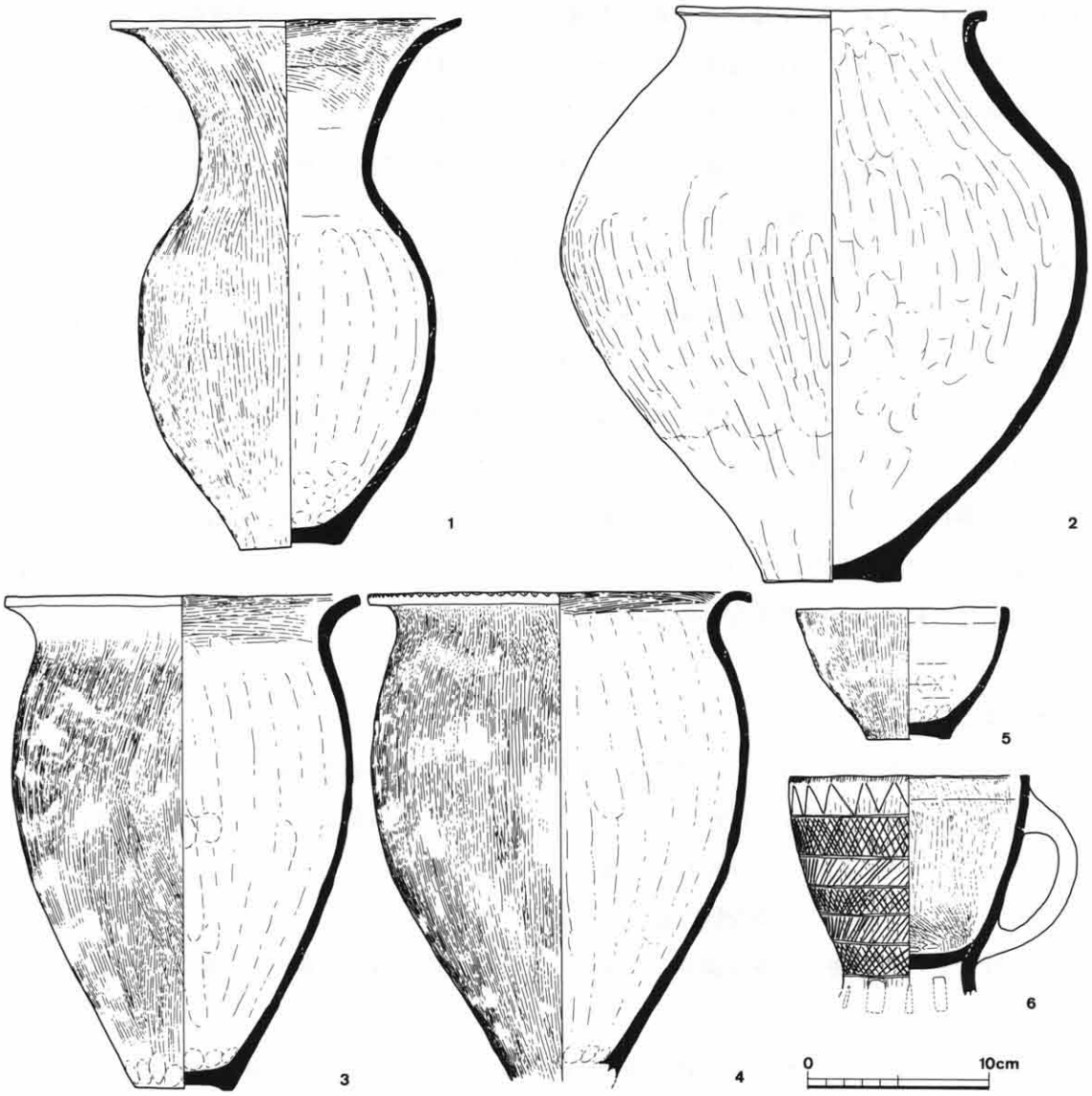
調査区中央を南北に流れる流路ＳＤ01は、検出面での幅が約２ｍの、「Ｖ」字に掘り込まれた溝である。埋土は全て粗い砂礫で、短期間に埋没したものと考えられる。砂礫の流力はきわめて強く、本来全体が「Ｖ」字に掘削されていたものと考えられる溝底は、その大半が削られて不整形な形態になっている。この砂礫を除去した段階で杭を１本検出したが、それ以外には溝に関連する遺構は見つからなかった。この溝からは古墳時代中期の遺物も出土しているが、それに伴う住居跡などは、今回の調査区では検出されていない。

古墳時代前期に属すると考えられるのは竪穴式住居跡と井戸各１基である。竪穴式住居跡ＳＨ54は一辺約5.5ｍの方形住居跡であるが、西角は中世以降の流路によって、すでに削られて失われている。

②弥生時代の遺構

弥生時代に属する遺構としては、方形周溝墓９基を検出した。うち１基(ＳＴ65)は円形周溝墓となる可能性があるが、半分は調査区外であり、断定は避けたい。

今年度調査の成果としては、検出された方形周溝墓の大半で、マウンドを確認することができ



第５図　下植野南遺跡出土遺物(2)
１．ＳＴ85東溝　２．ＳＴ94南溝、ＳＴ66北溝　３．ＳＴ52南溝　４・５．９区　６．ＳＴ85北溝

たことが挙げられる。その中でも比較的遺存状況の良かったＳＴ69では、マウンド構築方法についても観察することができた。マウンドは高さ20～30cm前後を検出したが、その間を２～３回に分けて盛り上げ作業が行われていることがわかった。墳丘盛土については断面での観察を行ったが、ブロック状の単位にまで分層することはできず、やや細かい砂粒を含んだ安定した層として観察される。この盛土は、周溝を掘削した土をそのまま使用した可能性があり、周溝が砂層を切り込んで掘削されている周溝墓では、盛土内部にも砂礫が多く含まれる傾向が認められる。

周溝はいずれも60～80cmの深さで掘削されており、その深さは山城地域の中では特異な事例といえる。ただし、周溝の下半部は掘削から短期間の内に埋没するため、溝底からは遺物は出土していない。これは、下植野南遺跡が河川堆積によって形成された土壌の上に位置するためで、調査中も雨が降るたびにに周溝が埋没するという状況であった。

どの周溝墓でも、主体部は検出できなかった。周溝の深さからみて、高墳丘の方形周溝墓を想

定することもできるが、下植野南遺跡の土壌からみて、完全に腐朽した可能性も否定できない。こうした状況であったため、周溝内埋葬の有無については言及することができない。

方形周溝墓からは、1基につき1～2個程度の土器が出土したが、その大半が完形かそれに近い形であった。遺物はいずれも畿内第Ⅱ様式末から第Ⅲ様式初頭の極めて短期間のものと考えられるが、1点のみ新しい傾向を持つ鉢形土器が出土している。6はＳＴ85北溝から出土した把手付きの鉢形土器である。器面は乳白色で、胎土も長石、石英、チャートを含み、在地のものと変わらない。外面にはヘラで斜格子紋等が描かれており、縦位置に把手が付く。把手は器壁に差し込む形態のもので、断面は長方形を呈する。脚部はすでに失われているが、復原すれば方形の透かしが6か所に穿たれており、その間には三角形の透しがさらに配置されている可能性が高い。この鉢は口縁端部の処理その他、やや新しい傾向を持つが、これまでに周辺調査では凹線紋をもつような遺物は出土していない。方形周溝墓の墳丘がのちの時期に再利用された事例が、愛知県朝日遺跡などでも報告されているため、位置づけには慎重にならざるを得ないが、現時点では第Ⅲ様式初頭の範疇で理解できるものと考えている。

3．まとめ

今年度の調査地では、特に、古墳時代の集落跡と弥生時代の墓域を確認することができた。古墳時代の集落跡については、縁辺部であったために、昨年度調査と比べて住居数の密度は低かった。地形的にも南に向かってゆるやかに落ち込む形となっており、利用しにくい地形であったものと考えられる。ただし、調査区で最も南に位置するＳＨ33からも、40点もの小玉や臼玉が出土しており、さらに南側での継続調査の成果が待たれる。古墳時代前期の住居跡についても同様の傾向が認められる。

弥生時代については9基の方形周溝墓を検出したことによって、周辺調査の成果とあわせると30基にも及ぶ墓域を確認できたことになる。特に今年度調査区において墓域の南西隅を確定できたことは大きな成果である。今回は主体部を検出することができなかったが、方形周溝墓1基あたりの供献土器が少ないこと、方形周溝墓のサイズはいずれも一辺10mに満たない全体的に小さめなものであること、遺物からみて極めて短期間に造営されていることなどから、被葬者は単数かまたはそれに近いものであったと考えられる。

下植野南遺跡では、現在も調査が継続中である。未だ見つかっていない造墓集団の集落域の発見が待たれるところである。

（ふじい・ひとし＝調査第2課調査第4係調査員）

律令期の土器製塩遺跡における鍛冶遺構

田代　弘・水野聡哉

1．はじめに

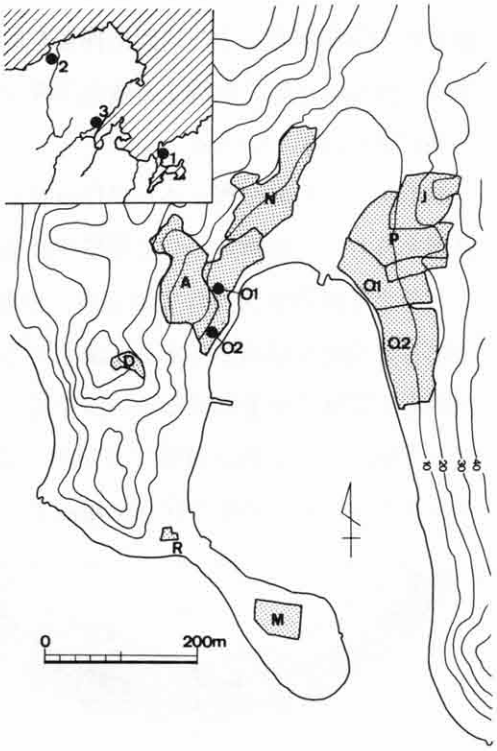
本稿では、舞鶴市浦入遺跡群の調査成果の中から律令期の鍛冶遺構を取り上げる。塩浜における鍛冶炉の分布や配置、製塩遺構との関連を検討し、本遺跡群の性格・成立背景の一端を考えてみたい。

2．遺跡の位置と概要

浦入遺跡群は、京都府舞鶴市千歳池ガナルほかに所在する。若狭湾に面する大浦半島の西岸に位置する浦入湾岸に形成された遺跡群である。内陸部との交通は海上のみに限られる臨海性の遺跡である。舞鶴火力発電所建設工事に伴い、1995年から1997年にかけて発掘調査を実施した。その結果、縄文時代早期から平安時代にかけて形成された遺跡群であることが判明した。縄文時代前期の丸木舟の発見、縄文海進以降の海水面変動に関する自然科学的な新知見、古墳時代中期の鍛冶工房、奈良時代から平安時代に営まれた土器製塩関連遺構群など、各時代にわたる重要な成果が数多く得られた。(注1)

今回検討する鍛冶遺構は、土器製塩に伴う造成面や炉跡などの遺構・製塩土器廃棄層などの包含層と重複して検出されており、塩生産との関わりが注目される。鍛冶関連遺構について記す前に浦入遺跡群における土器製塩の展開をみておくことにしたい。

浦入湾岸の土器製塩は、古墳時代後期に散発的に始まり(注2)、奈良時代前半頃から本格化する。奈良時代後半頃には湾岸の丘陵裾部を造成して平坦な作業場が各所に設けられた。背後の丘陵には工房跡とみられるテラス状の遺構や掘立柱建物跡なども設営された。平安時代後期から末期にかけて最盛期を迎え、湾岸の広い範囲に製塩炉跡、多量の製塩土器廃棄層が形成される。製塩研究史によれば、土器製塩は平安時代後期以降に揚浜式塩田法や鉄製煎熬容器など新たな製塩技術の普及ともに衰退・消滅すると考えられている。しかし、浦入遺跡はまさにこの時期に最盛期を迎えており、最後の土器製塩遺跡として注目されるのである。



第１図　浦入遺跡位置および全体図
１．浦入遺跡　　２．遠所遺跡
３．丹後国府推定地
（アルファベットは地区名）

調塩国である隣国の若狭との関連をみておこう。若狭では、７・８世紀に大容量の船岡式製塩土器と大型石敷炉を導入し、50を超す製塩遺跡を形成する。その後、傾式、吉見浜式と推移し、11世紀初頭頃に位置づけられる塩浜式に至って遺跡数も６となり、出土土器も激減して消滅にむかう[注3]。一方、浦入遺跡では、船岡式、傾式製段階の資料は少なく、吉見浜式の段階以降に出土量が急増する。若狭で土器製塩が終焉にむかう塩浜式以降に盛期をむかえ、12世紀半ば以降まで存続するのである。つまり、若狭の内外海半島沿岸で土器製塩が終焉した後、若狭湾の西端に位置する丹後国加佐郡の沿岸地域で土器製塩が活性化することが理解される。浦入製塩遺跡は律令期における若狭湾岸での土器製塩の展開をあとづけるうえで重要な生産遺跡なのである[注4]。

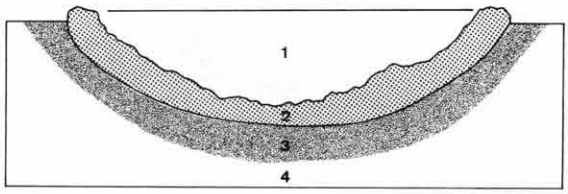
３．浦入遺跡の鍛冶遺構について

(1)鍛冶炉の認定と調査方法

浦入遺跡で検出した鍛冶遺構は、主に鍛冶炉である。鍛冶炉は炉底のみが遺存するものが多く、製塩に伴う焼土塊などと誤認する恐れがあった。そこで、正確を期するために先学に学び、以下の観点と方法で認識することとした。

鍛冶とは、原料である鍛鉄を加熱・鍛打して鉄製品を製作する、つまり、鉄器製作手法の一つである。鍛冶作業には、作業する親方と先手、火をおこす炉、風を送る鞴と羽口、鍛打する際の台である金床、加熱した素材をつかむハシ、鎚、焼き入れ・焼き戻しあるいはなましに使う水槽・砥石などが必要である[注4]。したがって、鍛冶炉・設置された金床石・これらが配置された建物跡などの遺構が考古学的に鍛冶作業を直接裏付けるものである。鉄塊系遺物や鍛冶炉に固有の椀形滓・鉄器鍛造時に飛散する酸化皮膜である鍛造剥片・羽口・金床石・叩き石・砥石などは鍛冶作業の状況証拠といえる。

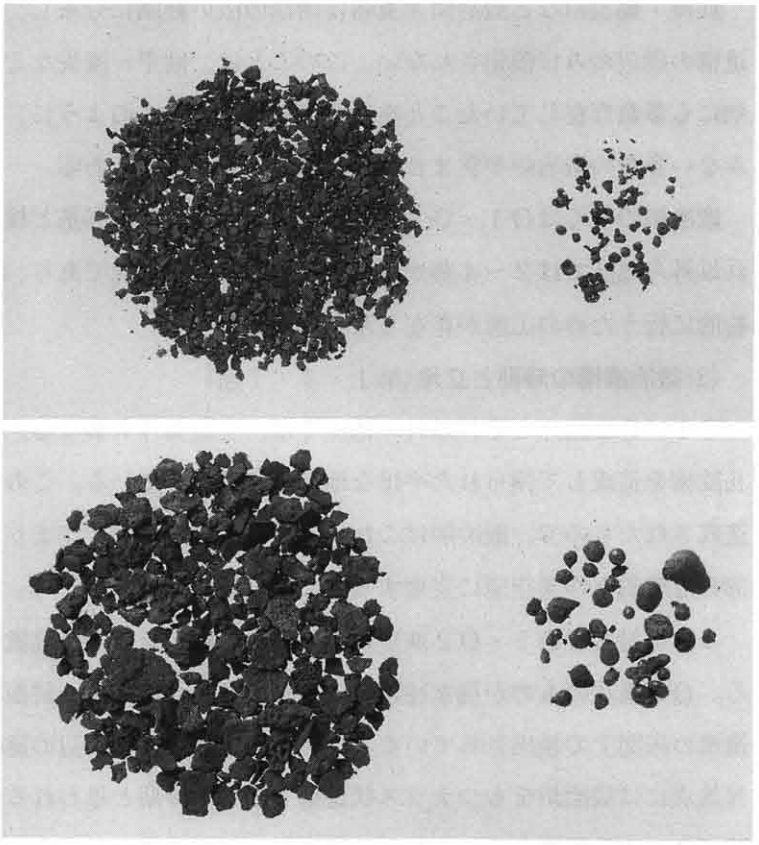
鍛冶炉は、地面を掘り込んで作られる簡単な施設であり、炉底に粘土や炭を用いて簡便な防湿処理を施し、上部構造として炉壁と送風施設である羽口を設ける。発掘調査では炉壁・送風施設などの上部構造が失われて炉底の一部あるいは炉掘形のみが検出される場合が大半であるので、検出した遺構を鍛冶炉であると証明することが困難である場合が多い。今回の調査で検出した鍛冶炉も上部構造が遺存するものはなく、かろうじて炉底が遺存するものが多かった。詳細に観察すると焼土との判別は容易であるが、鍛冶炉であるという確証を得るために、認定方法として、遺構埋土中に鍛造剥片の存在を確認することを必須の条件とした。加えて、粒状滓の検出にもつとめた。鍛造剥片、粒状滓は鍛打作業の実証と鍛冶の段階を押さえる上で重要な遺物と考えられるものだからである[注6]。このような認識のもとに、つぎの方法で土層を採取し、洗浄選別をした。



第２図　鍛冶炉模式図
１．埋土(炭・灰など)　２．青灰色硬化層
３．赤色土(被熱)
４．黄色粘質土(３・４は遺構ベース)

①鍛冶炉断面と土層採取　第２図は検出した各鍛冶炉の断面を検討して模式化したものである。第１層は遺構崩壊の二次的な堆積物である。

なかには炭・灰層が認められるものもあり、操業時の炭灰が遺存したと考えられる。本来は、鍛冶作業に伴う堆積物を包含する土層で、椀形滓が形成される層である。鍛打作業で生じる鍛造剥片、粒状滓が含まれる最も重要な土層である。第２層は、青灰色硬化層は炉底を構成する粘土で鉄滓や砂鉄、炭などを顕著に混入するものもみられた。赤色土は地山が、鍛冶炉の操業に伴う被熱によって赤変したものである。遺構観察の結果、鍛冶炉跡と推定した遺構について、上記の観点で各土層を採取した。



第３図　出土鍛造剥片写真
（１）第７図18　　（２）第７図26

②洗浄と分類の方法　採取した土層をプラスチック容器に仕分けし、それぞれ水を加えて軟化させた。浮遊した泥土を完全に除去するまで水換えを繰り返した。水換えの際に鍛造剥片や砂鉄が流失することをを防ぐためにフィルターを用いた。フィルターとして用いたのは市販の紙製の茶濾しである。最後にフィルターで水を切り、乾燥させた。鍛冶関連の微細遺物の取り出しには国際標準化機構規格のふるいを用いることが推奨されている[注7]が、本資料群は直径が１㎜以下のものがほとんどであり、ふるいでは多くが脱落してしまった。そこで紙製フィルターにかかるものはすべて取り出すことにしたのである。乾燥後に磁石を使って、磁力のある遺物と磁力を持たない遺物にわけた。前者を分類した結果、砂鉄、鍛造剥片、粒状滓が得られた。後者は大半が土壌であったが、滓の断片、粒状滓が少量みられた。このようにして取り出した鍛造剥片のうち、Ｏ１地区で検出した鍛冶炉８と鍛冶炉12出土のものを第３図に実大で示しておく。以上のような検討を経て観察し、(財)滋賀県埋蔵文化財協会大道和人氏、当調査研究センター野島　永氏の教示を受けつつ遺構評価を行った。

(2)浦入遺跡における鍛冶遺構と遺物の分布(第４図)

浦入遺跡では鍛冶炉と推定しうる遺構を49基検出した。このうち、鍛冶炉埋土・鍛冶炉周辺の土の洗浄により鍛造剥片の存在を確認し確実に鍛冶炉と判断したものは、Ｏ１地点16基、Ｏ２地点10基、Ａ地点３基、Ｎ地点３基、Ｑ１地点６基(古墳時代のもの３基を含む。)である。これ以外は遺構形状、鞴の羽口・鉄滓など鍛冶関連遺物の存在から判断したもので、Ｂ地点で４基、Ｏ２地点で４基、Ｑ２地点で３基である。

鉄滓・鞴羽口など鍛冶関連遺物は湾岸の広い範囲に分布し、鍛冶炉および鍛冶炉と推定しうる遺構の周辺のみに限定されない。このことは、削平・流失などにより確認できなかった鍛冶炉が他にも多数存在していたことを示すものである。このように、浦入遺跡には、近在の遺跡に類をみない多数の鍛冶炉が営まれていたと推定されるのである。

鍛冶炉の多くはＯ１・Ｏ２地点に集中し、検出数は30基と検出総数の約３分の２を占める。これ以外の地区では２～４基が散発的にするという状況であり、Ｏ１・Ｏ２地点には鉄器生産を集約的に行うための工房が存在したと考えられる。

(3)鍛冶遺構の時期と立地(第１・４・７図)

Ｏ１・Ｏ２地点とそれ以外の地点では、立地条件も異なる。Ｏ１・Ｏ２地点は、海岸に面した丘陵裾を造成して作られた平坦な地形上に位置している。この平坦面は土器製塩作業空間として造成されたもので、鍛冶炉はこれに重複して営まれた。つまり、居住空間とは切り離された臨海部の専業的な作業空間に立地するのである。

これに対してＯ１・Ｏ２地点以外の鍛冶炉は、丘陵上に位置する斜面・緩斜面地で検出している。Ｑ１地点のものが掘立柱建物内で検出されたほかは、斜面・緩斜面をカットしたテラス状の遺構の床面上で検出されている。Ｑ１・Ｑ２地点では周辺の建物跡は明確ではないが、Ａ・Ｂ・Ｎ地点には鍛冶炉をもつテラス状遺構１基と同時期と思われるテラス状遺構あるいは竪穴式住居跡が３～４基程度ある。これらは臨海部の製塩遺構と対をなす建物群で、製塩や鍛冶を行った工人の居所や工房と推定される。ここではＯ１・Ｏ２地点と異なり、居住域中で鍛冶が行われたことが考えられる。それぞれの鍛冶炉が操業された時期についてであるが、共伴する遺物が少なく詳細な時期決定が難しい。そこで建物遺構に伴うものについては共伴遺物を、遺物との共伴関係が明確でないものについては土層の堆積状況や他の遺構との切り合い関係などを参考として時期を推定することとした。

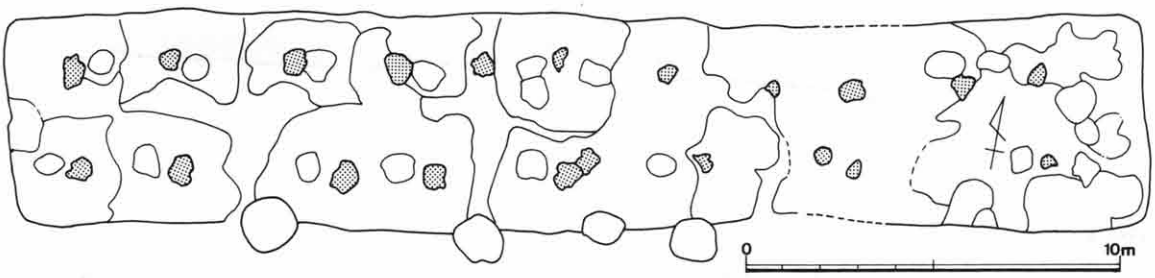
Ｏ２地点は鍛冶炉検出面の上層出土遺物である須恵器等(第８図１～６)や鍛冶炉検出中の遺物から奈良時代後半～平安時代前半、Ｏ１地点は切り合い関係から最も新しいＳＤ０１(第７図)出土の黒色土器(第８図７～９)や鍛冶炉検出中に出土した遺物から平安時代後半～末期頃と推定した。その他は共伴遺物からＮ地点は飛鳥時代、Ａ・Ｂ地点は奈良時代前半、Ｑ１地点は古墳時代中期と平安時代後半～末期、Ｑ２地点は平安時代後半～末期に操業されたものと推定した。

このように浦入遺跡の鍛冶による鉄生産は、古墳時代中期に始まり奈良時代前半にかけて散発的に行なわれ、奈良時代後半から平安時代にかけて急増したと推定される。鍛冶炉の盛衰は土器製塩の盛衰と軌を一つにしている点が注目される。つぎに、Ｏ１・Ｏ２地点で検出した鍛冶炉群について検討する。

(4) Ｏ１・Ｏ２地点の鍛冶炉群について(第４・７図)

先述のようにＯ１・Ｏ２地点では30基に及ぶ鍛冶炉を検出している。これらは狭い範囲に密集し造られているのであるが、同時に何基操業されていたかということが、生産規模を推定する上で重要であると考える。しかし、Ｏ１・Ｏ２地点では建物等の鍛冶炉に伴う施設は明確ではなく、

第４図　Ｏ２地点鍛冶炉配置図



第５図　茨城県春内遺跡ＳＸ01
中島信親「古代鍛冶工房と鉄器生産体制の変容について」（『都城』７(財)向日市埋蔵文化財センター）1996　P55．第６図１を一部改変

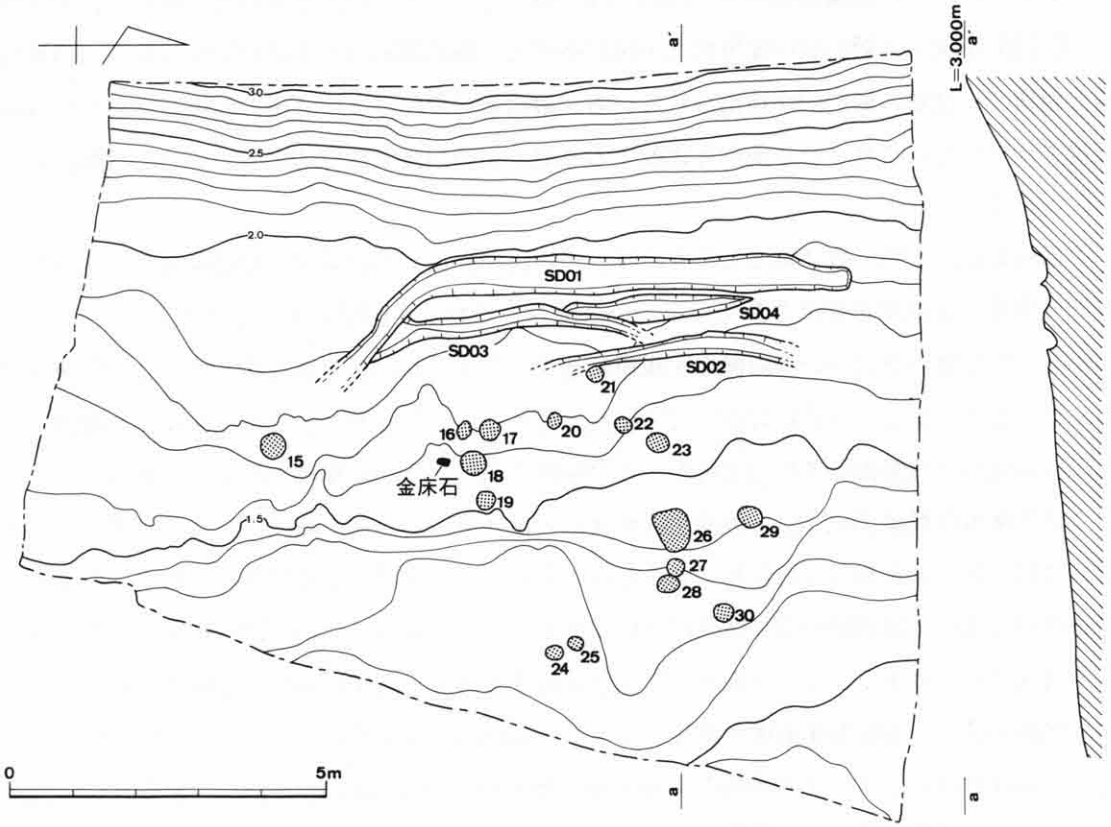
また層位的に全ての鍛冶炉についてその前後関係を把握することはできなっかたため、この点から推定するのは困難である。そこで、鍛冶炉の分布状況を観察して同時に何基操業されていたかを考えてみる。

なお、鍛冶炉が同時に操業されていた可能性を考える時に作業空間としたものは、中島信親がＡ２類・Ｂ２類とした同時操業の鍛冶炉を複数基持つ鍛冶工房の鍛冶炉間の間隔を参考としている。このＡ２類・Ｂ２類の鍛冶炉間の間隔より広いものや近いものについては同時操業の可能性があると考え、これより間隔が狭く近接して造られているものについては同時操業の可能性は低いと考えた。(注8)

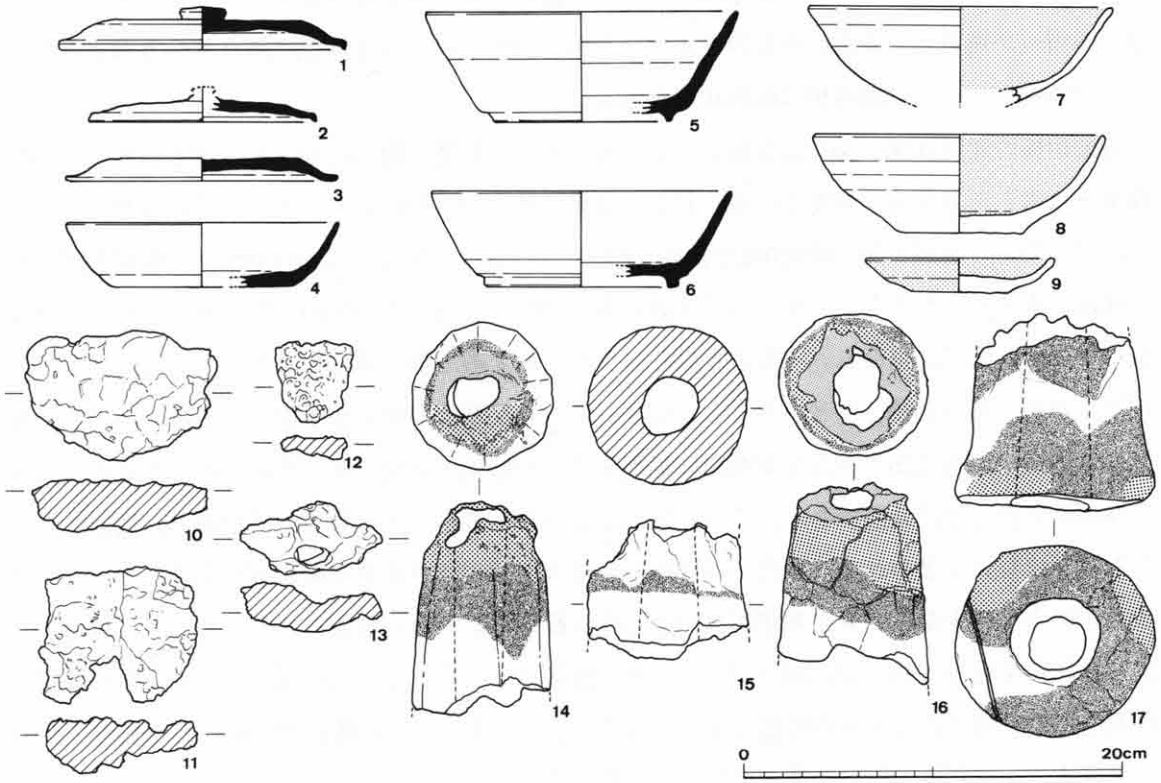
①Ｏ２地点の鍛冶炉（第４図）　鍛冶炉は南北約23m×東西約６mの範囲で14基を検出した。奈良時代後半から平安時代前期にかけての土器製塩遺構の最終操業面に重複して、層位的にはほぼ同一面で検出されていると考えてよい状況である。鍛冶炉埋土内から鍛造剥片の出土を見たものは10基である。配置状況をみてみよう。

それぞれの鍛冶炉の間隔は７～９、10～11、12～13では間隔が50cm未満である。極めて狭く、これは鍛冶作業に必要な空間の確保の点から考えると同時に設置されたとは考えにくいものである。一定の作業空間で鍛冶炉の造り直しを行った結果であろう。他のものについては間隔が約２mあるいはそれ以上あり、同時に操業された操業の可能性をもっている。また、分布状況についてみてみると注目されるのは、この地区の鍛冶炉が列状に分布していることである。特に７～９、10～11、12～13の造り直しをもつ鍛冶炉は直線的に連続して分布する点に注目したい。このような状況から、ここでは３基が同時操業していた可能性を考えておきたい。また、直線的に配置という点のみからいえば、３・４・14もこれらに加えられる可能性をもっている。次にこの直線的配置という点に注目してみる。中島信親はＡ２類・Ｂ２類としたものには一定の間隔をあけ、規則的に配置されているものが多いとさ

第６図　金床石および周辺鍛冶炉



第７図　Ｏ１地点鍛冶炉配置図



第８図　Ｏ１・Ｏ２地点出土遺物実測図

１～６・14・15.Ｏ２地点　　７～９.Ｏ２地点ＳＤ01(第７図)　　10・13・16.Ｏ１地点
11.Ｏ１地点29炉底　　12.Ｏ１地点26炉底　　17.Ｏ１地点19直上(第７・９図)

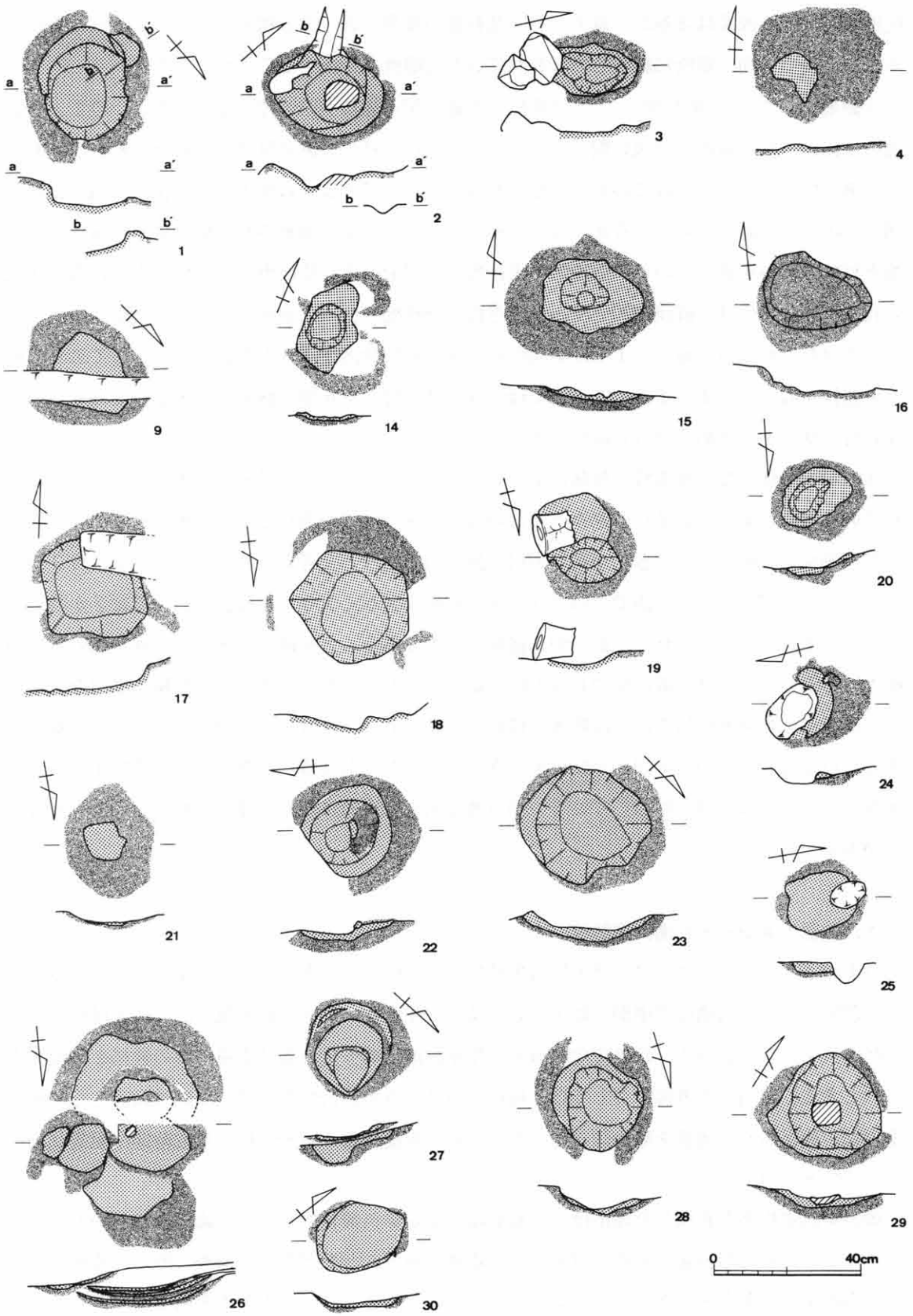
れている。そこで中島論文の中から配置状況が最も確認しやすいと思われた茨城県春内遺跡ＳＸ１（第５図）を選んで鍛冶炉の配置状況を例にあげた。春内遺跡ＳＸ１は約30m×約５mの横長の竪穴遺構で、21基の鍛冶炉が検出されている。鍛冶炉の間隔は２～４mの間隔をもって直線的に配置されている。これをＯ２地点と比較すると鍛冶炉の間隔と直線的配置については類似しているといえる。

中島信親がＡ２類・Ｂ２類としたものは、建物跡が検出され鍛冶炉の同時操業の可能性が高いものである。建物跡が検出されていないＯ２地点とこれらを同様のものとすることはできない。しかし、Ｏ２地点そのものが斜面を大規模に造成して作られた居住域と切り離された作業空間であることを考えると、中島信親が「官営鍛冶工房」としたＡ２類・Ｂ１類の大規模な鍛冶工房のように組織的に労働編成された工房が、この場所にあったことが推測されるのである。

②Ｏ１地点の概要（第７図）　鍛冶炉は南北約８m×東西約５mの範囲で16基を検出した。鍛冶炉には同じ箇所に重複して造られているものがあり、これを数えると計21基となる。Ｏ１地点はＯ２地点に比べて鍛冶炉の遺存状態は良好であり、全てのものについて鍛冶炉埋土内より鍛造剥片を回収することができた。立地としてはＯ２地点と同じく海岸に面した斜面を造成して平坦な作業空間を設け、製塩関連遺構と重複するように鍛冶炉が設置されている。Ｏ１地点ではこの斜面と平坦面の境に４本の溝が重複して繰り返し掘られている（第７図ＳＤ01～ＳＤ04）。しかし、これが塩関連遺構、鍛冶関連遺構のいずれに伴うものかは明らかにし得なかった。この他に、金床石と考えられる礫を原位置で確認している。鍛打のために頭頂部が壊れた花崗岩の円礫で、折損部の周辺が被熱して変色したものである。金床石は16～19のいずれかに伴うものと考えられるが、決めがたい。次に鍛冶炉の配置状況をみる。

鍛冶炉間の間隔は16～30では近接して造られており、作業空間の面からみて全てのものが同時操業とは考えられない。何度かの造り直しの結果15基という数になったと考えておきたい。ここで注目したいのが16～30の鍛冶炉が円形に分布している点である。この円形配列の要因を26～28の状況から考えておきたい。26～28では26が同一か所で５回、27が２回の造り直しを行い、28は27と平面的に上下に重なる。この造り直しの１つ１つを鍛冶炉１基分と考えると、計８基の鍛冶炉が１か所に造られ続けたということになり、かなり長期間の操業が予想される。このように考えると円形の配列は26～28の作業空間に規制をうけた結果ではないかと推定されるのである。26～28の造り直しが計８回であり、それに規制を受けたと考えられる鍛冶炉は10基で、数的には大きな違いはないと思われる。またこの点から見れば、26～28の作業空間に規制を受けた16～25の鍛冶炉のうち、少なくとも１基が26～28と同時に操業していたと考えられる。さらに、鍛冶炉の分布の状況を見ると16～19、24～25、26～28は他に比べてまとまった状態であり、これらは同一作業空間での造り直しである可能性を考えることができる。これに離れた場所にある15を入れると、最大で４基程度の同時操業が可能であったと思われる。

以上がＯ１地点の概要である。Ｏ１地点もＯ２地点と同様に居住域から切り離された作業空間を造り出しており、そこに16基もの鍛冶炉を検出した。しかし、その配置状況はＯ２地点が一定



第９図　Ｏ１・Ｏ２地点鍛冶炉平面実測図

１～４・９・14.Ｏ２地点鍛冶炉平面実測図(番号は第４図の配置図に対応)

15・30.Ｏ１地点鍛冶炉平面実測図(番号は第７図の配置図に対応)

の作業空間をあけて配置されているのに対し、狭い範囲に集中するものだった。また、鍛冶炉の配置から、同時操業は２基から最大でも４基程度の操業であったと推定され、Ｏ２地点と比較すると小規模で、同一箇所に継続して行われていた可能性を指摘することができる。

③鍛冶炉について（第９図）　ここで検出した鍛冶炉本体について述べておきたい。Ｏ１、Ｏ２地点で検出された鍛冶炉は浅い掘り込みを行い、そこに粘土を貼り付け、炉底を造るものであった。遺存状態の悪いものはこの粘土の部分が流失して、16のように焼土のみの状態で検出された。同一ヶ所に造り直しの見られる26・27では掘り込みを行わず、廃棄された鍛冶炉の窪みに薄い整地を行い鍛冶炉を造っている。鍛冶炉の平面形は不定形の円・楕円形で、炉の大きさは遺存状況の良好な23や28では、直径が30～35cm、深さ約６cm程度である。炉壁については明瞭に検出されたものはないが、Ｏ２地点の１では炉底の続きが鍛冶炉検出面より上方に立ち上がっており、その可能性をもっている。また、26、29では炉底に貼り付いた状態で椀形滓が出土しており、炉の廃絶時の状況をとどめる資料も確認している。

次に炉の本体でなく操業時の被熱によりできた赤褐色土について見ると、赤色土の一部がとぎれているものがある。鹿子Ｃ遺跡などでこの部分に鞴の羽口が遺存していた例が見られ、このような事例から赤褐色土のとぎれが鞴の羽口の挿入口であったと考えられている。(注9) Ｏ１、Ｏ２地点では１、２、17、23、28、29でこのような部分が検出されており１、17、28、29では２か所に見られる。また、２ではこれがが鍛冶炉に連結する溝であることが確認できた。これを鞴の羽口の挿入口と考えれば、２は鍛冶炉の北西方向に鞴を設置していたといえる。また鞴の羽口を見るとＯ２地点出土の第８図14ではほぼ均等に被熱を受けており、ほぼ水平に設置されていたと推定できる。Ｏ１地点出土の第８図16では被熱を受けた部分が一部剥離しており角度を推定することは困難であった。このほか図示していないがＢ地点出土のものに斜めに挿入されたと考えられるものがある。(注10)

４．鉄器生産からみた浦入遺跡群

以上のように、浦入湾岸における鉄器生産は、通時的にみると生産形態の変化が次の二段階として理解できた。古墳時代中期に始まり奈良時代前半にかけてみられる散発的な生産段階と、奈良時代後半から平安時代にかけての組織的な生産段階である。後者は本遺跡群の性格を反映するものと考え、該当する遺構群としてＯ１地点、Ｏ２地点の鍛冶炉群を取り上げて検討した。検討事項は、検出された遺構を鍛冶炉と認定するための前提作業と鍛冶炉群の形成時期・配置状況についてであった。

鍛冶炉認定作業を重視した理由は、土器製塩による赤色酸化ブロックと識別が難しいものが多かったこと、私たち自身が初めて対象とする遺構であることなどから、調査に際して遺構を客観的に判断する基準を明らかにする必要に迫られたからである。認定手続きを明らかにすることによって資料の価値を高めたいという意図もあった。

遺構群の形成時期は、埋土に包含された遺物、遺構近辺から出土した遺物を判断基準として、

Ｏ２地区を奈良時代後半頃、Ｏ１地点を平安時代後半から末期頃に形成された遺構群と考えた。遺構の配置状況については、Ｏ２地点の事例は大形の工房内に複数の鍛冶炉を配置して同時操業する工房類型との類似性を指摘し、Ｏ１地点の事例は同一地点で長期間操業された結果炉跡が重複しつつ円形に分布するに至ったと判断した。以上のことから、これらの遺構群は集中的な鉄器生産を反映するものであり、組織的に労働編成された鍛冶工房と考えた。

このような鍛冶工房存在を認めるとすると、生産対象とした製品やその供給先を明らかにする必要があるが、生産物の形状を直接に示す製品や未製品・端切れなどが出土しておらず、残念ながら果たすことができなかった。そこで、鍛冶炉埋土中から採取した鍛造剥片など微細な遺物のあり方からから生産状況の一端を推測してみたい。

(1)鍛造剥片からみた鍛冶の特徴

両地区の鍛冶炉跡あるいはその周辺から検出した鍛冶関連遺物の共通する特徴として、①炉底で形成される椀形滓があまり発達せず小形のものが多い、②鍛造剥片は第３図(１)に示したように１～２㎜前後の小形ものが多く、表面が薄い銀灰色あるいは銀黒色を呈するものが主体的である。粒状滓も１～２㎜以下の微細なものが多い。第７図26(第３図２)の鍛冶炉は５基以上の重複がみられる特異なものである。径５㎜に及ぶ例はこれのみである。鍛造剥片の大小が鍛冶の性格の違いを示す事例として注目したい。③精錬滓など、本格的な精錬作業を跡づける資料が存在していない等、を挙げることができる。これらの諸特徴は、資料を実見した大道和人によると、鉄器生産工程としてはおもに鍛造工程の終盤の状況を示すものであり、鍛造剥片の色調や大きさからみて小型品の生産、破損鉄器の再生などの鍛冶が考えられるのではないかとのことであった。野島　永からも同様の指摘を頂いている。そうであるならば、これらの工房では、外部から鍛冶原料の供給を受けて、おもに小型鉄器類を鍛造したと言うことができるであろう。

では、製品の供給先、鉄器製作工房の経営主体についてどう考えればよいであろう。この問題は浦入遺跡群の性格に関わる問題でもある。出土遺物や遺構形成のあり方など周辺状況から、主として成立背景について見通しを述べておきたい。

(2)出土遺物からみた浦入遺跡の成立背景

浦入遺跡群では、奈良時代後半頃に規模の大きな造成が開始され土器製塩炉跡や製塩土器の出土量も増加をみるなど、この時期に塩の生産形態が自家消費的な小規模生産から専業性の高い大規模なものへと移行した。(注11) 個別分散的労働現場であった塩浜が、集約的な労働力投下現場へと変質したのである。生産規模拡大の背景として、律令支配が浦入の塩浜へ直接的に及んだことが想定されるのであり、傍証する資料として、和同開珎(708年)、萬年通寶(760年)、神功開寶(765年)など奈良時代貨幣や土馬、人形・馬形などの祭祀関連遺物、墨書土器などの律令期の遺物を挙げることができる。古代銭貨は交換手段であるとともに呪術的・宝物的側面を有することが明らかにされているところであり、(注12) 土馬、人形・馬形などとともに呪術的な供儀に使用されたと理解できる資料である。担い手は、律令官人あるいはその配下にある生産集団であろう。銭貨は調塩国である若狭国において塩生産の中核をなしたとみられる福井県大飯町船岡製塩遺跡でも検出

されており[注13]、関連が注目される。須恵器を主体とする供膳具が大量に搬入されている。

出土遺物の中で、最も重視したいのは、「与社」の墨書が記された奈良時代後半頃の須恵器である。この土器は、浦入遺跡群西岸の丘陵斜面に作られた最も規模の大きい竪穴式住居跡（Ａ地区ＳＨ01）に近接する遺構で検出したものである[注14]。与社は、木簡の用例から与謝と読めるもので、岩滝町・宮津市にまたがる阿蘇海沿岸地域を指す地名である[注15]。この地域は国府、国分寺をはじめとする官衙・寺院が集中する丹後国の政治的中枢と推定されている。また、地理的にも若狭湾最西端に位置する天然の良港をなし、海上交通・陸上交通の結節点となっている。

浦入とこの与謝地域は、若狭湾西岸を構成する臨海地域として連続しており、海上交通によれば非常に近接した位置関係にある。浦入遺跡からは与謝地域の東岸を形成する黒崎を眼前に望むことができるほどである。この墨書土器は、奈良時代後半頃の浦入遺跡群が与謝地域と直接的な関連を有していたことを示す重要な資料なのである。

以上のことを念頭に置いて、鉄器需要のあり方から浦入遺跡群における鉄器生産の背景を考えてみる。

第１は、塩浜の開墾、工房の造作に必要な鉄製用具の製作・補修など、浦入湾内に展開した土器製塩集団の需要に対応する生産である。Ｏ１・Ｏ２地区の鍛冶炉跡群は、海辺の土器製塩炉跡のために造成した作業場を一時期占有するなど、鍛冶と土器製塩との関連は無視できない。湾岸の各所に奈良時代から平安時代にかけて土器製塩現場の造成や塩浜周辺の開墾などの跡を残しており、大規模な労働力が断続して投入されたことがうかがえるのである。しばしば労働再編が行なわれたことで、塩浜において開墾具としての鉄器の需要が高まった。このことが塩浜における鍛冶工房設営につながったのではないだろうか。

第２は、遺跡外部の需要に対応したとする見方である。郡衙・国衙などの官営施設をはじめ在地での鉄器需要をまかなうための鉄器生産であった可能性を考えてみたい。土器製塩遺跡での鍛冶遺構の検出事例として有名なものには、大宰府主厨司の管轄する厨家や津厨跡と推定される福岡市海の中道遺跡がある。村上恭通はこの遺跡の鉄器生産について、厨家で消費される鉄器を塩生産現場において付随的に行われたとみ、類例として石川県寺家遺跡を挙げた[注16]。海の中道遺跡、寺家遺跡ともに国家的な施設が管轄した生産遺跡であるが、ここでは塩と鉄の複合的生産が考古学的事例として明確に示されており、浦入遺跡群のあり方を考える上で示唆的である。先述したように、浦入遺跡群は律令官人の介在がうかがわれ、しかも阿蘇海沿岸の丹後国府推定地域との関連が想定できるからである。想像をたくましくして、浦入遺跡群は塩を中心とする海産物の供給拠点である国府厨の管轄する生産遺跡であったと考えてみてはどうだろうか。

第３は、中央へ貢納するための鉄生産が行われたことも考えてみたい。丹後地域では弥栄町遠所遺跡[注17]やニゴレ遺跡[注18]、黒部遺跡[注19]において砂鉄を原料とする製鉄遺跡の存在が明らかにされ、今後、律令期の製鉄遺跡数の拡大が見込まれる状況がある。こうした製鉄遺跡の成立をみるうえで重要な資料が、遠所遺跡で発見されている。製鉄にかかわる砂鉄埋納土坑から出土した木簡である。この木簡には中央政府が田租籾を遠所遺跡に拠出したことを示す記載があった。田租籾は緊急時

の米の放出など中央政府の政策に関係する以外は通常不動倉に備蓄されるものであることから、土橋　誠は8世紀以降の遠所遺跡の鉄生産に中央政府が関与した可能性を指摘した[注20]。最近の調査成果は、律令期における丹後国の主要な物産の一つとして鉄があり、それが律令国家により導入されたものである可能性を示しているのである。8世紀以降に鉄の貢納を義務づけられていない関東や北陸地域において鉄生産が活性化することについて、東北地方との軍事的緊張を背景とするものであり「在来の技術的発展によりもたらされたものというより、律令国家により導入された鉄生産であった可能性[注21]」が指摘されている。丹後国における鉄生産の開始も律令権力の鉄の需要に応じたものであり、阿蘇海沿岸に推定される官衙が鉄生産を主導したとみておきたい。製鉄遺跡で生産された鍛冶原料は、官衙を通じて鍛冶工房へ分配され、調・庸鉄器(鋤・鍬)として鍛錬されたであろう。浦入遺跡群は、こうした鉄器生産現場の一つであった可能性も、考えておきたい。

5．おわりに

鍛冶炉群のあり方から遺跡群の一面を考えみた。鍛冶炉群の検討を通じて、浦入遺跡群の性格の一端を考えてみた。官衙によって二次的に組織された専業的生産拠点である可能性を指摘した。しかし、一方では、笠百私印という木印が押捺されている製塩土器支脚が発見されており[注22]、浦入遺跡での塩生産に笠を名乗る氏族が関わった可能性も考えておかねばならない。製塩土器支脚の形式から9世紀代のものと私は推定しているが、この時期、笠氏が浦入での塩生産を主導していたかもしれないのである。承和11～15(844～848)年に丹後国司として笠数道の名がみえ、私印との関連が想定できる。多様な観点からの検討が必要であることを痛感する。今後、大方のご教示・御指導を得ながら、遺跡の展開過程について検討を深めていきたい。

なお、本文は、3－(2)～(4)を水野が、その他を田代が執筆した。図面は主に水野が作成し、写真は田中彰と田代が撮影した。製図にあたって真下春美の協力を得た。

なお、本稿を作成するにあたって以下の方々からご教示・御指導を頂いた。記して感謝の意を表します。

大道和人、大澤正巳、入江文敏、伊藤　太、井上満郎、杉原和雄、岸本雅敏、中島信親、小森哲也、真鍋成史、松本達也 、吉岡博之

(たしろ・ひろし＝調査第2課調査第2係調査員)

(みずの・としや＝舞鶴市教育委員会嘱託)

注1　吉岡博之・和泉大樹・田代　弘「舞鶴市浦入遺跡群」(『日本考古学年報』50　日本考古学協会) 1999

注2　水野聡哉「舞鶴市浦入遺跡P地点出土の製塩土器」(『丹邇波考古』第11号　両丹考古学研究会) 1999

注3　石部正志「原始・古代の土器製塩」(『講座・日本技術の社会史』2　日本評論社)　1985

注4　田代　弘「12世紀の土器製塩炉跡」(『京都府埋蔵文化財情報』弟69号　(財)京都府埋蔵文化財調査

研究センター）　1998

注５　朝岡康二「野鍛冶」（『ものと人間の文化史』85　法政大学出版局）　1998　ｐ14

注６　大澤正己「古代交野と鉄～冶金学的見地からのアプローチ～」（『平成９年度市民文化財講座講演会資料』　1998.２.１　ｐ６

注７　注６と同じ

注８　中島信親「古代鍛冶工房と鉄器生産体制の変容について」（『都城』７）　1996
Ａ２類は掘立柱建物内に同時操業の鍛冶炉を複数基持つもの。Ｂ２類は竈をもたない竪穴遺構に同時操業の鍛冶炉を複数基もつもの。

注９　小林公治「奈良・平安時代の鍛冶の復元的考察」（『文学研究科紀要別冊』第15集　早稲田大学大学院文学研究科）　1988

注10　津野　仁・岩上照朗『金山遺跡Ｉ－一般国道４号線(新４号国道)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査－』　栃木県埋蔵文化財調査報告書第135集　栃木県教育委員会　1993
この報告の中で鞴の羽口の溶融部の垂れ下がる方向等から羽口の上下の向きを推定し、これをもとに被熱酸化部被熱状況から角度を推定している。

注11　注１と同じ

注12　栄原永遠男「銭貨の流通」（『古代史の論点３　都市と工業と流通』　小学館）　1998

注13　水野和雄「律令制下の生産」（『若狭の古代遺跡』）　1999

注14　浦入遺跡A地点テラス状遺構ＳＫ04で出土した。下記文献第６図18、図版第７－18。
石井清司・田代　弘・筒井崇史「浦入遺跡平成９年度発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第85冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1998

注15　井上満郎理事、伊藤　太氏にご教示いただいた。

注16　村上恭通「厨戸と鉄器生産」（『倭人と鉄の考古学』　青木書店）　ｐ166

注17　『遠所遺跡』（『京都府遺跡調査報告書』第21冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1997

注18　岡崎研一「ニゴレ遺跡」（『京都府遺跡調査概報』第66冊）　1995

注19　増田孝彦・河野一隆「黒部製鉄遺跡（石熊地区）平成５年度」（『京都府遺跡調査概報』第65冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1995

注20　土橋　誠「第10節　木簡」注17上掲書　ｐ64

注21　今津勝紀「律令税制と流通」（『古代史の論点３　都市と工業の流通』　小学館）　1998　ｐ248

注22　吉岡博之「丹後の土器製塩」（『シンポジウム製塩土器の諸問題－古代における塩の生産と流通－』塩の会シンポジウム実行委員会）　1997

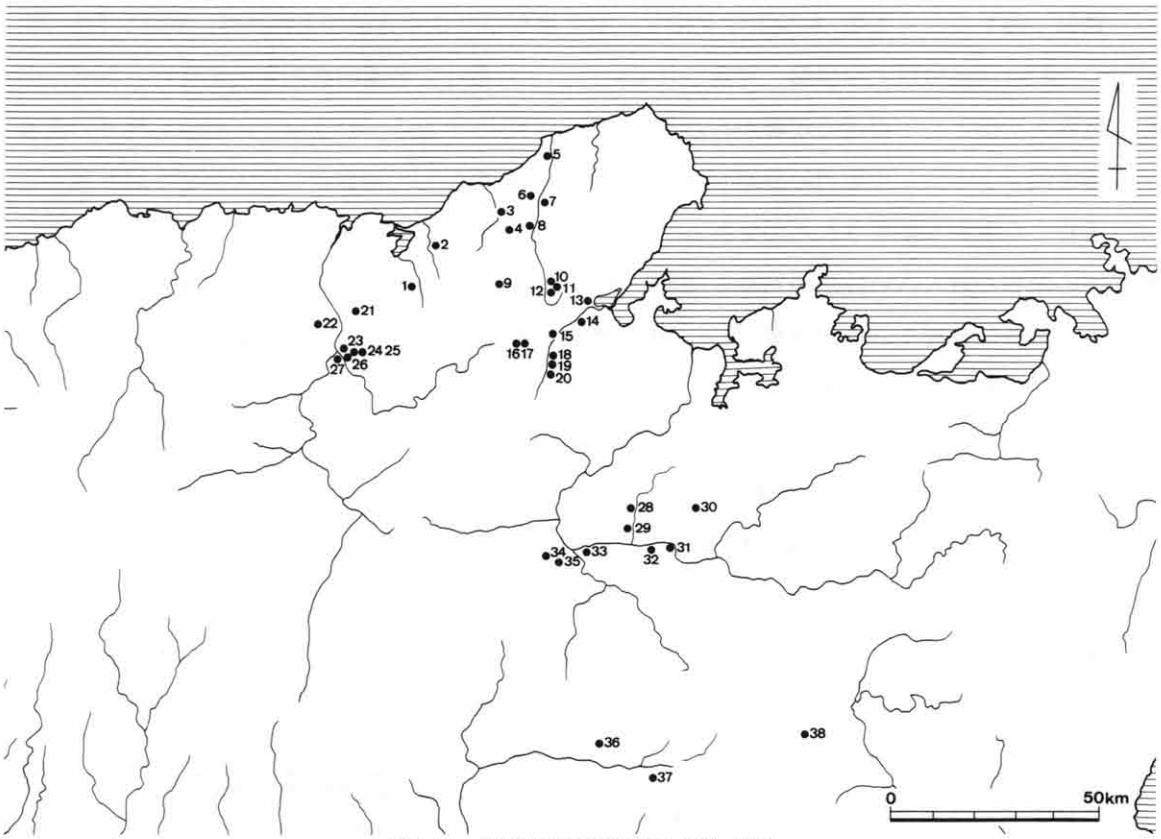
近畿地方北部における古墳成立期の墳墓(1)

野島　永・野々口陽子

1．はじめに

近年、京都府北部(丹後･北丹波地域)においても、弥生時代後期から古墳時代初頭前後(庄内式併行期～布留式初頭)における注目すべき墳墓調査例が増加している。これらの墳墓は、弥生時代から古墳時代に移行する時期の、墓制の痕跡を示すだけでなく、中国を中心とした東アジア文明圏周辺の衛星文明としての倭人社会が、葬送儀礼を通して独自な統合的発展にむかう側面を考察する一助とすることもできる。

しかし現状では、そのような墳墓の発掘調査成果の詳細な情報が報告されているとは言い難い。小稿の目的は、まず、京都府北部における弥生時代後期から古墳時代初頭前後の墳墓調査の諸例とその供献土器を、現在報告されている情報をもとに簡潔に列挙して、その変遷を素描することにある。紙幅の都合上、埋葬主体部の構造や副葬品についての考察と注は次回以降としたい。



第１図　関連墳墓分布図(1/900,000)

1.権現山　2.北谷　3.浅後谷南　4.赤坂今井　5.大山　6.ゲンギョウ山　7.奈具　8.太田(南)
9.金谷　10.左坂　11.帯城　12.三坂神社　13.大風呂南　14.霧ヶ鼻　15.玉峠　16.西谷
17.犬石西　18.内和田　19.明石愛宕山　20.白米山北　21.若宮　22.本井　23.半坂　24.立石
25.エノ田　26.東山　27.土屋ヶ鼻　28.庄村　29.成山　30.大宮　31.久田山　32.新庄
33.宝蔵山　34.豊富谷　35.広峯　36.内場山　37.黒田坪　38.黒田

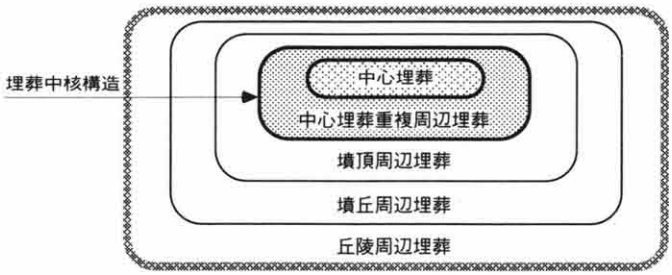
2．丹後地域の台状墓とその埋葬配置

大山墳墓群[注1](竹野郡丹後町大字大山小字寺大門、第３図２)の３～８号墓は、丘陵稜線上に連接して営まれた台状墓群である。後期前半から中葉にかけて埋葬が行われる。３・５・６号墓では、丘陵稜線に平行して１基の埋葬が墳頂中心に配置され(以下、中心埋葬とする)、それぞれの墳丘裾周囲に丘陵等高線に平行して周辺埋葬(以下、墳丘周辺埋葬とする)が配置される。次に７・８号墓の中心埋葬と５・６号墓の墳丘周辺埋葬が行われ、最後に丘陵周辺を取り巻くように埋葬(以下、丘陵周辺埋葬とする)が行われた状況が、出土状況の先後関係から想定できる。

左坂墳墓群[注2](中郡大宮町字周枳小字左坂)は、一部未報告のため、詳細な情報を欠くが、後期初頭を中心とする。Ｇ支群西側丘陵(第３図３)では、18号墓から15号墓に埋葬域を移動させる。共時的に見れば、埋葬は丘陵稜線上、等高線に平行して並列に配置されるが、平坦面と斜面による区画が明瞭ではない。丘陵裾斜面にも丘陵周辺埋葬が検出されている。一方、Ｇ支群南側丘陵では、同群西側丘陵と異なり、素環頭鉄刀と鉄鏃、朱の塗布が行われた26号墓第２主体を中心埋葬とし、墳頂部平坦面にはそれを囲繞するように周辺埋葬を行い、墳丘裾周囲に丘陵等高線に平行して墳丘周辺埋葬を配置させる。

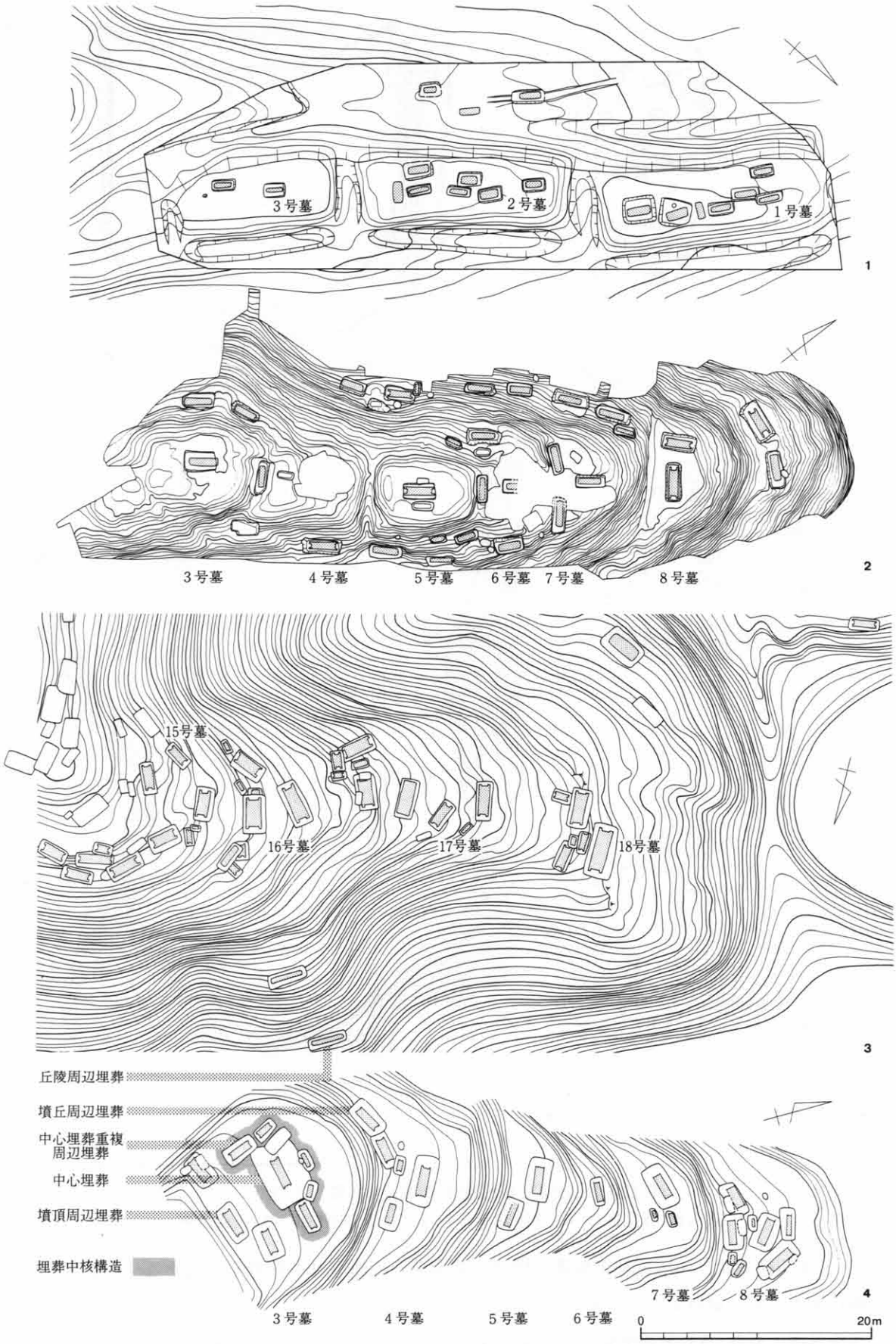
三坂神社墳墓群[注3](中郡大宮町字三坂小字有明、第３図４)も後期初頭を中心とする。素環頭鉄刀・鉄鏃・鉇やガラス玉類･水晶玉類を持ち、朱を塗布した３号墓第10主体部は、長さ5.7m・幅4.3m・深さ1.8mの巨大な墓壙に安置されていた。３号墓は、墓壙の掘削先後関係からみてこの中心埋葬を契機として周辺の埋葬が行われたことが明らかである。つまり、この中心埋葬の墓壙の一端を壊すようにして周辺の墓壙が穿たれており、結果として初葬者の巨大墓壙を取り巻くように重複した埋葬が配置されるのである。土器からみれば、比較的埋葬が密集する３・４・８号墓の中心埋葬が最も古い段階の初葬者埋葬、次に５・６・７号墓と８号墓周辺埋葬が続き、３号墓の中心埋葬に重複する周辺埋葬(以下、中心埋葬重複周辺埋葬とする)は、最も新しい段階まで中断せずに行われるようである。

以上の例から第２図のような、共時的にみた埋葬配置関係を抽出することができる。とくに三坂神社でみられた中心埋葬(初葬者)の大形墓壙と、その一端のみを破壊して重複させる周辺埋葬(中心埋葬重複周辺埋葬)の墓壙の関係は、墓域利用の最終段階まで認識されており、中心埋葬(破壊されない木棺)の位置を含め、初葬者の葬送内容が社会に記憶されつづけたことを示している。後に大形化する台状墓にも、中心埋葬たる初葬者の墓壙の一端を重複させる次葬者との関係性が連綿と受け継がれる(第４・５図参照)。人々の宇宙観を規定する、ある種の祖先説話・創造神話などといった社会の記憶に依拠した埋葬秩序[注4]による専有化された葬送儀礼の結果と推測されることから、それを埋葬中核構造と呼びたい。

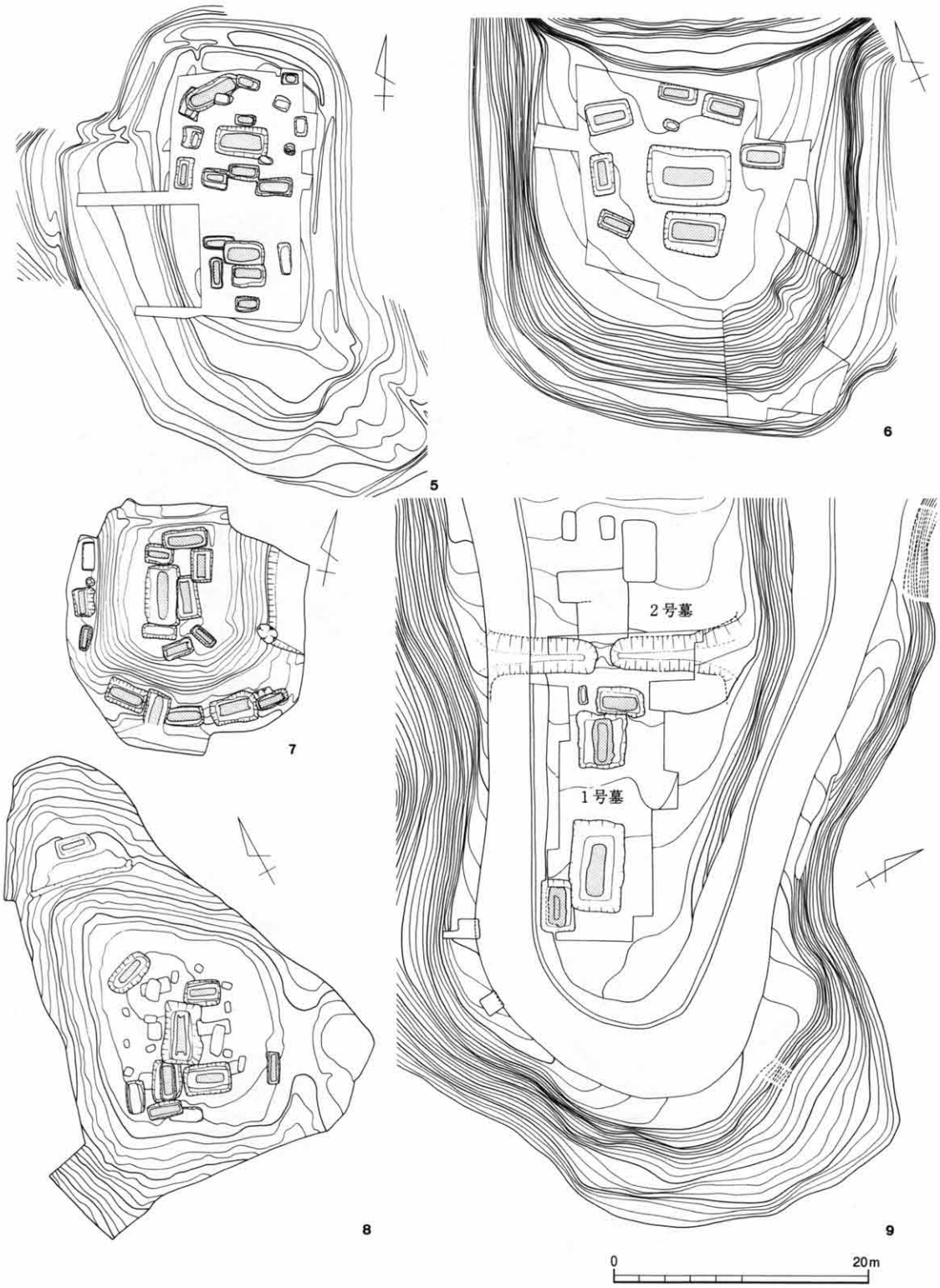


第２図　台状墓における共時的埋葬配置関係

帯城墳墓群[注5](中郡大宮町字三坂小字帯城)の丘陵最高所Ｂ地区北群(第４図



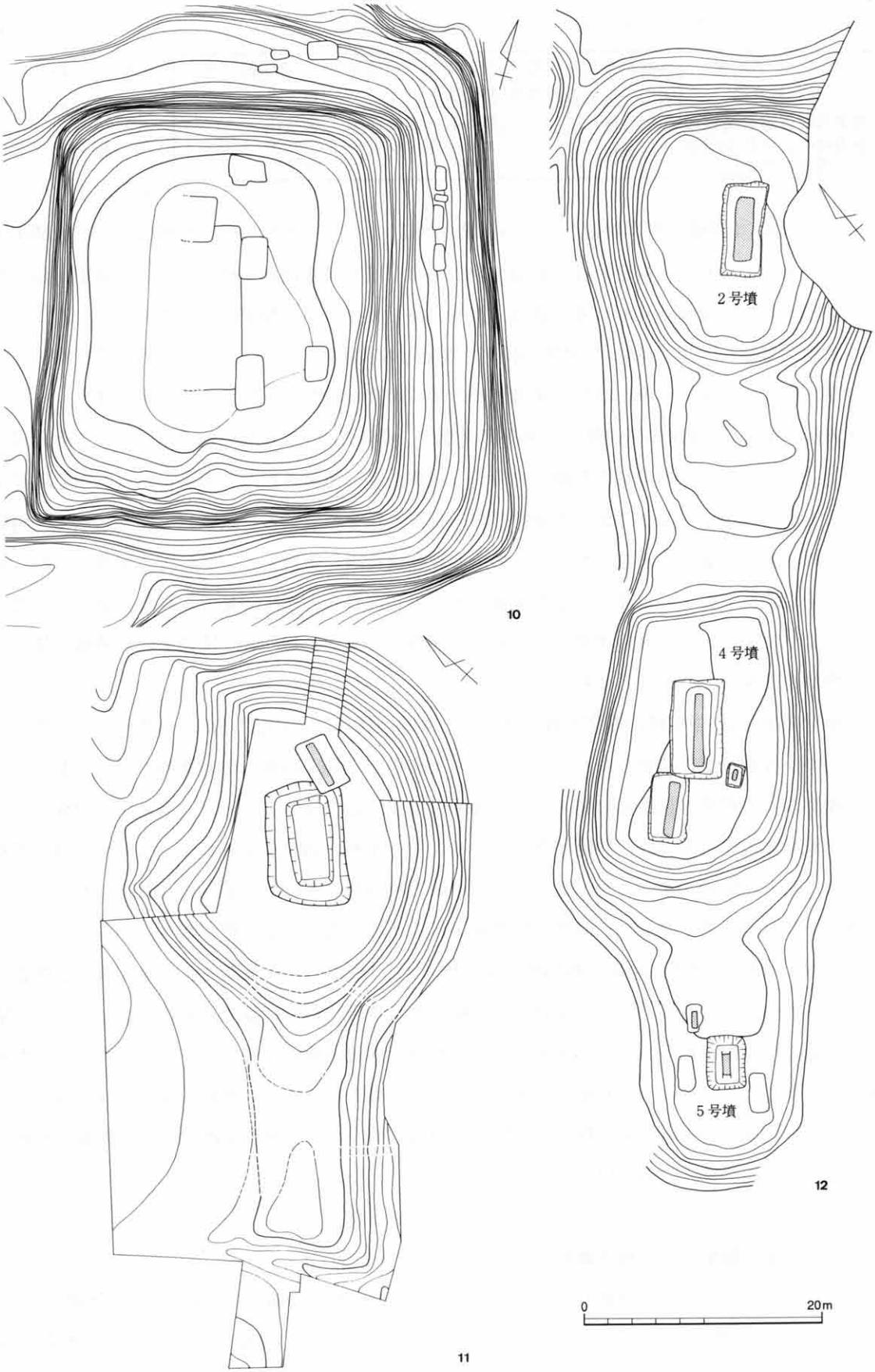
第3図　台状墓の類例略図(中期後半と後期前半)(1/500)
1.奈具　2.大山　3.左坂(G支群西側丘陵)　4.三坂神社



第４図　台状墓の類例略図（後期後半以降）（１/500）
５.帯城（Ｂ地区）　６.浅後谷南　７.金谷　８.内和田　９.大風呂南

５）は、後期後葉に、中心埋葬の周囲に墳頂周辺埋葬を囲繞させる配置を形成する。左坂Ｇ支群南側丘陵のそれに類似する。鉄剣・鉇・刀子など鉄製品が出土した。

浅後谷南墳墓群(注6)（竹野郡網野町高橋、第４図６）も、帯城墳墓群Ｂ地区北群同様、後期後葉において、墳頂周辺埋葬が中心埋葬の墓壙を壊さずに囲繞する。帯城墳墓群Ｂ地区北群と同様のシナ



第5図　台状墓と重複埋葬墳墓の類例略図(終末期前後)(1/500)
10.赤坂今井　11.黒田　12.太田南

第１表　台状墓における共時的埋葬配置分類

共時的埋葬配置	後期前半（連接型）	後期後半（単独型）	終末期以降
並列散在形	大山・左坂Ｇ西丘陵	帯城Ａ？	霧ヶ鼻
墳頂部周辺埋葬囲繞形	左坂Ｇ南丘陵	帯城Ｂ・浅後谷南	権現山
墳頂部周辺埋葬重複形（埋葬中核構造）	三坂神社	大風呂南・赤坂今井・金谷	内和田・太田南４号墳

リオを持った埋葬活動が行われつづけたとみたい。鉄剣・鉇・ガラス玉類が出土した。

金谷１号墓(注7)(中郡峰山町字鱒留小字金谷、第４図７)は、やや小形の墳丘規模である。後期後葉に、中心埋葬とそれに重複し続ける周辺埋葬、および墳丘周辺埋葬で構成される。箱形木棺と刳抜式舟形木棺の２種類が見られる。鉄剣・鉄斧・鉇・ガラス製玉類が出土した。

内和田墳墓群(注8)(４・５号墳)(与謝郡加悦町字明石小字内和田、第４図８)も庄内式併行期に、中心埋葬の周囲に墓壙の一端を壊して連接させた周辺埋葬が行われ、墳丘周辺埋葬を伴う。

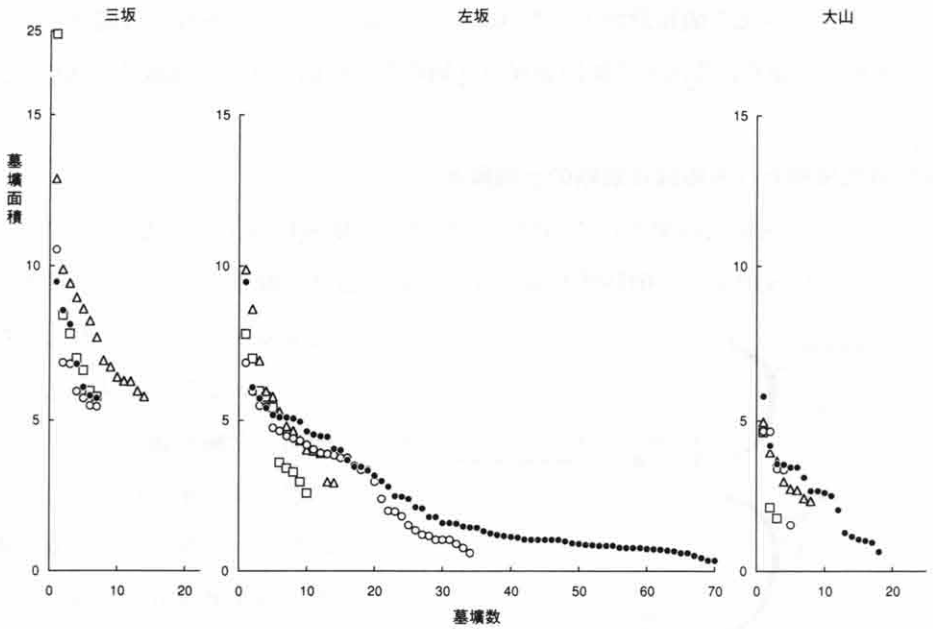
大風呂南墳墓群(注9)(与謝郡岩滝町字岩滝小字大風呂、第４図９)１号墓の規模は、おおよそ長辺30m・短辺25mほどの大形の長方形墳丘を持つ。後期後半に造営されたと考えられる。中心埋葬は、長さ7.3m・幅4.3m・深さ２mの墓壙を穿ち、舟形木棺を埋置する。鉄剣11・ガラス釧１・銅釧13などの卓越した副葬品が見られた。この中心埋葬南西隅に重複するように周辺埋葬が行われる。１号墓墳頂北側でも中心埋葬に一端を重複させる周辺埋葬との構成が見て取れる。墳丘周辺埋葬を伴うようである。１号墓の北側の２号墓も未発掘であるが、切り合い関係を持つ墓壙が確認され、埋葬中核構造を持つことがわかる。

赤坂今井墳丘墓(注10)(中郡峰山町字赤坂小字今井、第５図10)は、南北37.5m・東西32.5mの墳丘規模を持つ。後期後葉に造営されたと考えられ、大風呂南１号墓同様、中心埋葬とそれに重複する周辺埋葬による埋葬中核構造を持つ。その周囲に墳頂周辺埋葬と、さらに、墳丘周辺埋葬があり、それぞれ墓壙規模の階層性が明瞭となっている。中心埋葬の調査はなされていないが、周辺埋葬からは、鉄刀・鉄鏃・鉇などが出土している。前方後円形の黒田墳丘墓(注11)(第５図11)にも中心埋葬に重複する周辺埋葬がみられ、同様の埋葬秩序による葬送儀礼が受け継がれる。

大田南古墳群(注12)(竹野郡弥栄町字和田野小字大田、第５図12)の丘陵最高所、２号墳の中心埋葬には、舟形木棺が埋置されており、破砕した龍鈕の画文帯環状乳神獣鏡や鉄剣が出土した。４号墳は、３基の埋葬が認められ、中心埋葬はその南西側の周辺埋葬の後のものと考えられているが重複の関係が保たれている。５号墳は、地山を整形して築造され、中心埋葬は長さ4.6m・幅3.2mの長方形の墓壙内に凝灰岩製の板石を利用した箱式石棺である。棺内北西隅から、青龍三年銘を持つ方格規矩四神鏡や鉄刀が出土した。

３．台状墓の類型とその葬送儀礼

以上、主要台状墓諸例を概観したが、共時的にみれば、棺の埋置方向が直列志向(稜線に平行)と並列志向(等高線に平行)のものがある。中期後半に普遍化した墳墓形態を示す奈具墳墓群(注13)(第３図１)などと比べれば、大山墳墓群では、中心主体の位置的優位がわかる。後期前半までは、同様に丘陵を区画・整形することによって方形平坦面を確保し、埋葬を継続させる点が共通して



第6図　墓壙規模と副葬(着装)品組成

左　三坂神社、中　左坂、右　大山の各墳墓の墓壙規模

(□；bt型(玉類+鉄製道具類)　△；t型(鉄製道具類)　○；b型(玉類)　●；n型(副葬(着装)品なし))

おり、連接した台状墓が丘陵全体を覆っていく過程を復原することができる。しかし、後期後半以降、台状墓は丘陵全体を占拠せず、多くは丘陵最高所、あるいは丘陵最先端に単独占地され、埋葬回数も減少していく傾向にある。

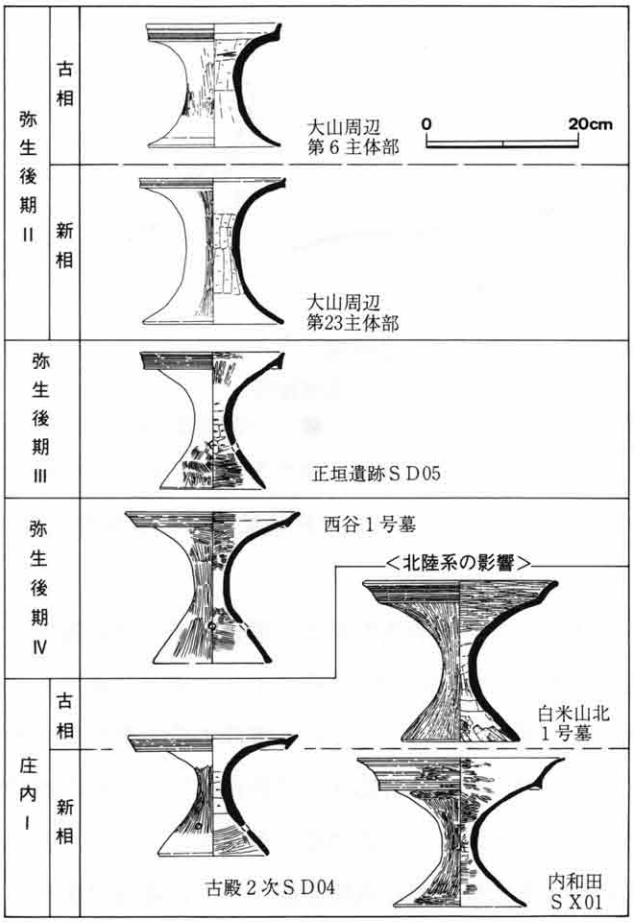
今までみてきたように共時的埋葬配置の結果から、並列散在形および墳頂部周辺埋葬囲繞形と、埋葬中核構造をもつ墳頂部周辺埋葬重複形に分類し得る(第1表)。それぞれの集団の維持した社会の記憶に依拠した埋葬秩序の差異が反映した結果と考える。とくに、埋葬中核構造をもつ墳頂部周辺埋葬重複形墳墓の一部には、墳丘と中心埋葬の墓壙の大形化、厚葬化を行い、その隔絶性を強調し、墳丘裾周辺にまで埋葬を配置させる行為を明確にし始める。第6図[注14]のように、墳頂部周辺埋葬重複形の三坂神社墳墓群と墳頂部周辺埋葬囲繞形の左坂墳墓群G支群、並列散在形の大山墳墓群の墓壙規模と副葬品組成の相関をみてみると、三坂神社墳墓群における相関と、その階層性が明瞭であることがわかる。埋葬中核構造を形成した葬送儀礼に底流する埋葬秩序が、より複雑かつ広範に意識された可能性があり、権威的諸関係を含んだ社会諸構造の再生産の強化に関与[注15]していたと類推できる。

社会構成員、とくに現世社会に功績のあった人々などの死に伴う葬送儀礼が、観念化された来世社会の成員になるための通過儀礼であり、かつ生の断絶による危機に直面した現世社会における社会諸構造の再構築とその維持に作用した[注16]と考えるならば、同一の墓域(場)における死者の葬送の反復(埋葬者数の多さ)は、円環的時間観念のもとにおける集合的祖霊観念の不変性を表徴していると思われる。よって、弥生時代後期後半以降の単独台状墓における埋葬者数の減少に、円環的時間観念の衰退と祖霊観念の動揺を読みとることができる。漢の頽勢に源を発したさまざまな社会不安に対する応戦として、現世社会における権威的諸関係の再構築とその維持のための、超越的祖霊観念

の確立が、特定個人の死を儀礼資源とした壮大な葬送儀礼の創出と不可分に関連しており、葬送儀礼[注17]が社会諸構造に強烈に作用する傾向が起こり始めたと指摘できる。詳論は、別稿を期したい。

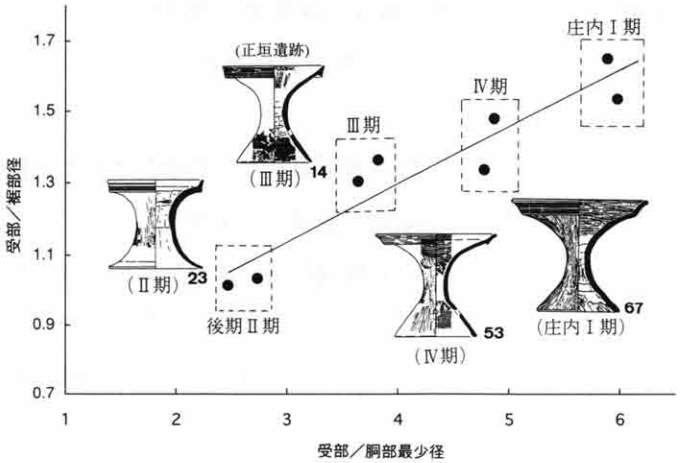
4．弥生時代後期から古墳時代前期の土器編年

本節の課題は、弥生時代後期から古墳時代前期初頭の墳墓供献土器の編年を示すことにある[注18]。ここでは、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての土器群を編年する上で、擬凹線文器台の型式変遷が、一つの一貫した型式変化をとげていることに注目し、その変遷を援用した編年観を提示する。



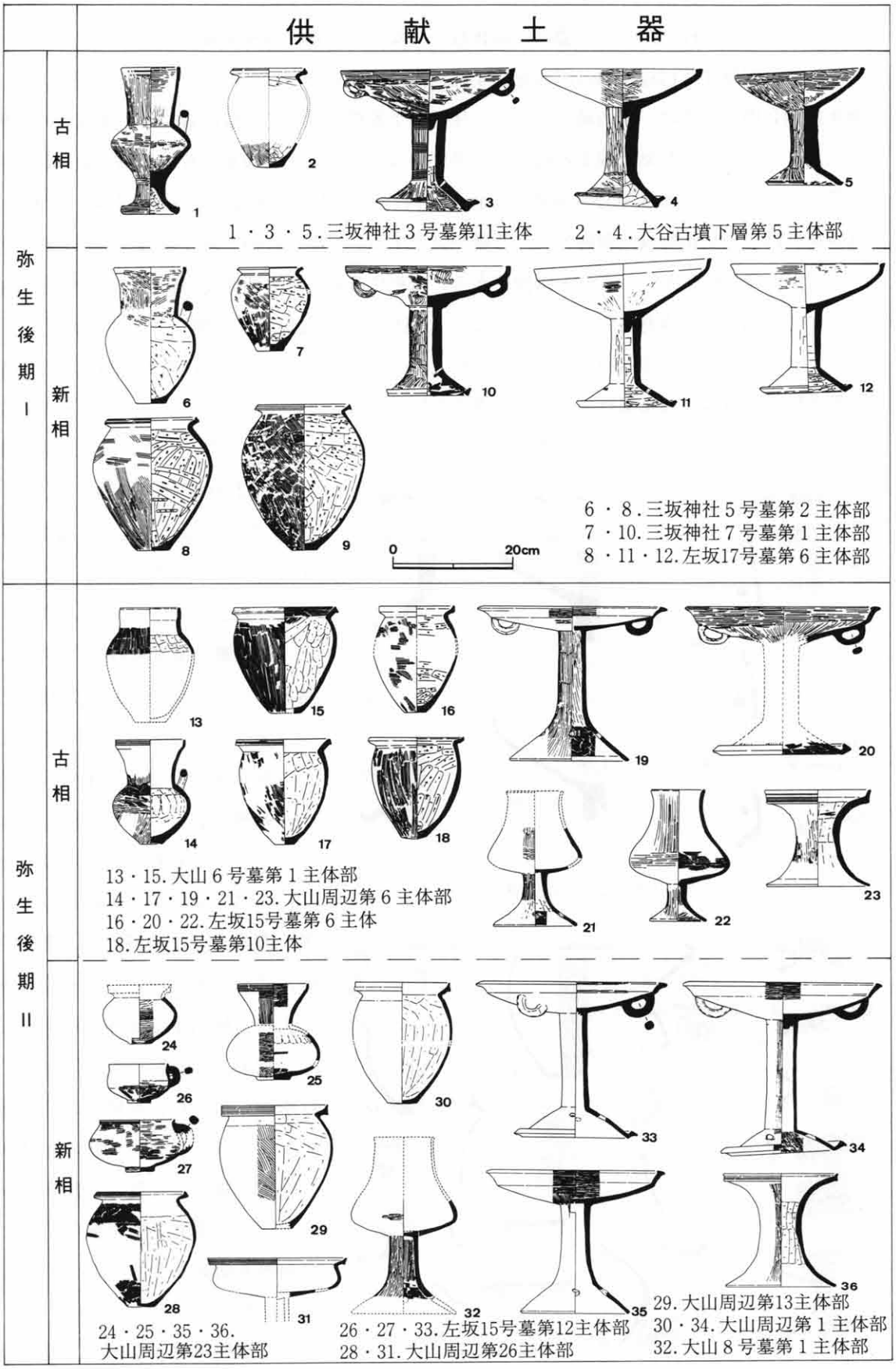
第７図　器台の型式変遷

器台は、属性が少なく、型式変遷が比較的、明瞭である。擬凹線文をもつ器台の型式変化は、第７図のように、胴部径、裾部径ともに、時期が下降するに従い、小さくなるという傾向が看取される。これを系数として表したものが、第８図であり、胴部径および裾部径に対する受部径の比率は、漸次、増大するという、一連の数値の変化が読み取れる。こうした擬凹線文を施す器台の型式変遷は、弥生時代後期から古墳時代初頭の土器編年を行ううえで、基軸としうるものである。器台の型式変遷は、各期の概要において、詳述することにし、以下には、墳墓出土土器を中心とした土器編年試案を示す。



第８図　器台系数値

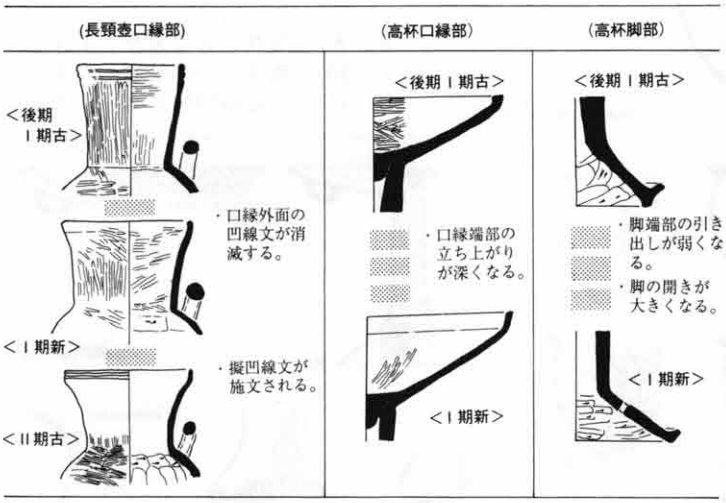
弥生後期Ⅰ期　Ⅰ期は、第Ⅳ様式的な特徴が一部に残る一方、高杯などの器種に新たに畿内第Ⅴ様式の影響がみられる段階である[注19]。Ⅳ様式的な特徴が、より強く残る段階を古相とする。Ⅰ期の資料には、三坂神社３号墓第11主体部、大谷古墳下層墓第５主体部[注20]などがある。Ⅰ期の組成は、供献土器では、長頸壺・甕・高杯が主な器種である。長頸壺は、古相では、口縁部外面に凹


供　献　土　器
弥生後期Ⅰ
古相
1・3・5.三坂神社3号墓第11主体
2・4.大谷古墳下層第5主体部
新相
6・8.三坂神社5号墓第2主体部
7・10.三坂神社7号墓第1主体部
8・11・12.左坂17号墓第6主体部
0
20cm
弥生後期Ⅱ
古相
13・15.大山6号墓第1主体部
14・17・19・21・23.大山周辺第6主体部
16・20・22.左坂15号墓第6主体
18.左坂15号墓第10主体
新相
24・25・35・36.
大山周辺第23主体部
26・27・33.左坂15号墓第12主体部
28・31.大山周辺第26主体部
29.大山周辺第13主体部
30・34.大山周辺第1主体部
32.大山8号墓第1主体部

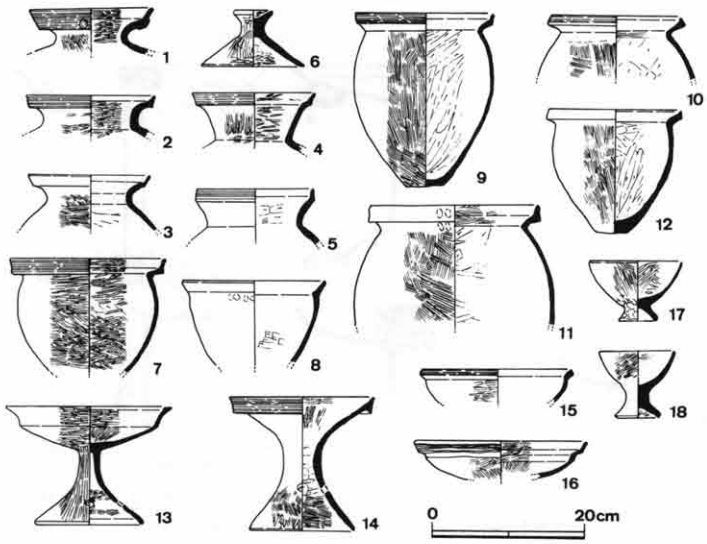
第9図　編年試案(1)

線文が一部残る(第10図参照)。また、高杯でも同様に脚部端部を強く斜め上方に引き出すⅣ様式的な手法が残る(第９図３・４)。甕は、個体数が少なく、全体の器種組成等、不明な点が多いが、短く外反し、肥厚する口縁端面に凹線を施す瀬戸内系の甕(２・７・８)が、主体である。

弥生後期Ⅱ期　Ⅱ期は、当地域において、後期の土器群に特徴的な擬凹線文[注21]が、甕以外の器種にも広がり、様式的な特徴が強まる最初の段階である[注22]。丹後町大山墳墓群６号墓第１主体部、同周辺第６主体部、大宮町左坂15号墓第６主体部、同15号墓第10主体部などの資料があげられる。集落遺跡では、久美浜町橋爪遺跡ＳＤ21Ⅱ層[注23]が該当する。Ⅱ期は、擬凹線文器台(23・36)や長頸壺(14・25)の型式変化から、新古を指摘できる。古相にみられる擬凹線文の器台(23)は、最古段階のもので、胴部の引き締まりが小さく、受部と同様に、裾部が大きく開くことを特徴とする。器台は、Ⅱ期を通じて、基本的に、口縁端部が上方に拡張する。また、前段階から型式変化の辿れる把手付長頸壺は、口縁部外面に、擬凹線文が施されるようになる。古相に認められる新たな器種としては、稜線の明瞭な皿状の杯部をなす長脚の高杯(19・20)や、ワイングラス状の台付壺(21・22)が挙げられる。甕では、「く」の字に短く外反し、端部に面をなすものが主体的だが、これらには、端面にナデを施すもの(15)と、擬凹線を施すもの(17)がある。新相では、器台(36)は大形化するが、大きな変化はみられない。また、長頸壺(25)では、水差形土器から系譜を引いた把手が、付かなくなる(25)。新相において注目されるのは、擬凹線文高杯(31)の出現である。この段階では、高杯の脚部はまだ未発達だが、後期後半に大きく展開する高杯の祖形となる。把手付小形鉢(26・27)もこの段階から現われ、Ⅳ期にかけて盛行する。ワイングラス状の台付壺(32)は、脚部に長脚化の傾向がみえる。擬凹線文を施す甕(29)の口縁端部外面幅が大きくなり、垂直に立ちあがる。

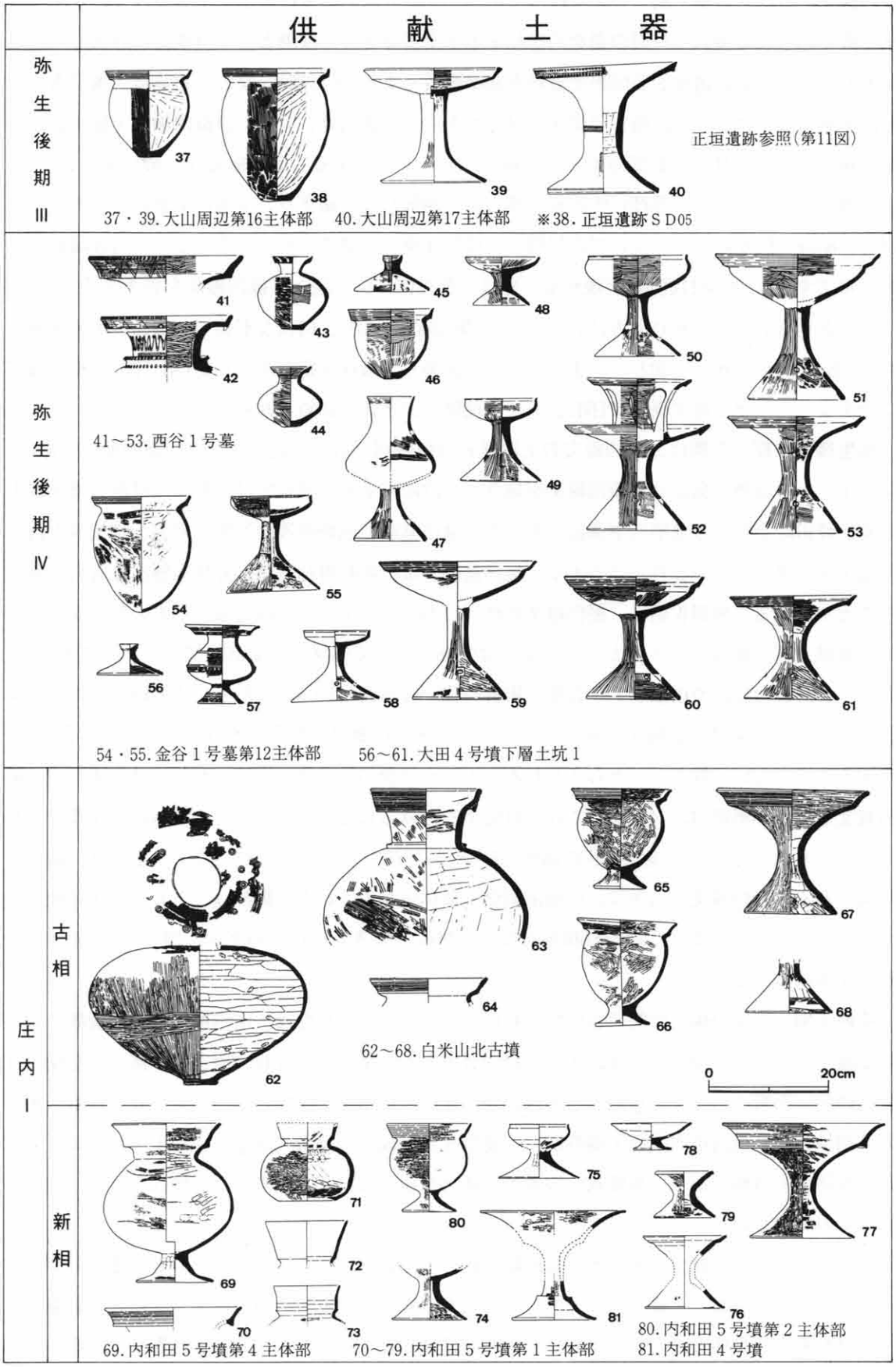


第10図　Ⅰ・Ⅱ期における各器種の特徴



第11図　正垣遺跡ＳＤ05出土土器<弥生後期Ⅲ期>

弥生後期Ⅲ期　Ⅲ期は、擬凹線文土器の基本型式がほぼ出揃い、


供　献　土　器
弥生後期Ⅲ
正垣遺跡参照(第11図)
37・39.大山周辺第16主体部　40.大山周辺第17主体部　※38.正垣遺跡ＳＤ05
弥生後期Ⅳ
41～53.西谷１号墓
54・55.金谷１号墓第12主体部　56～61.大田４号墳下層土坑１
庄内Ⅰ
古相
62～68.白米山北古墳
0　20cm
新相
69.内和田５号墳第４主体部　70～79.内和田５号墳第１主体部　80.内和田５号墳第２主体部　81.内和田４号墳

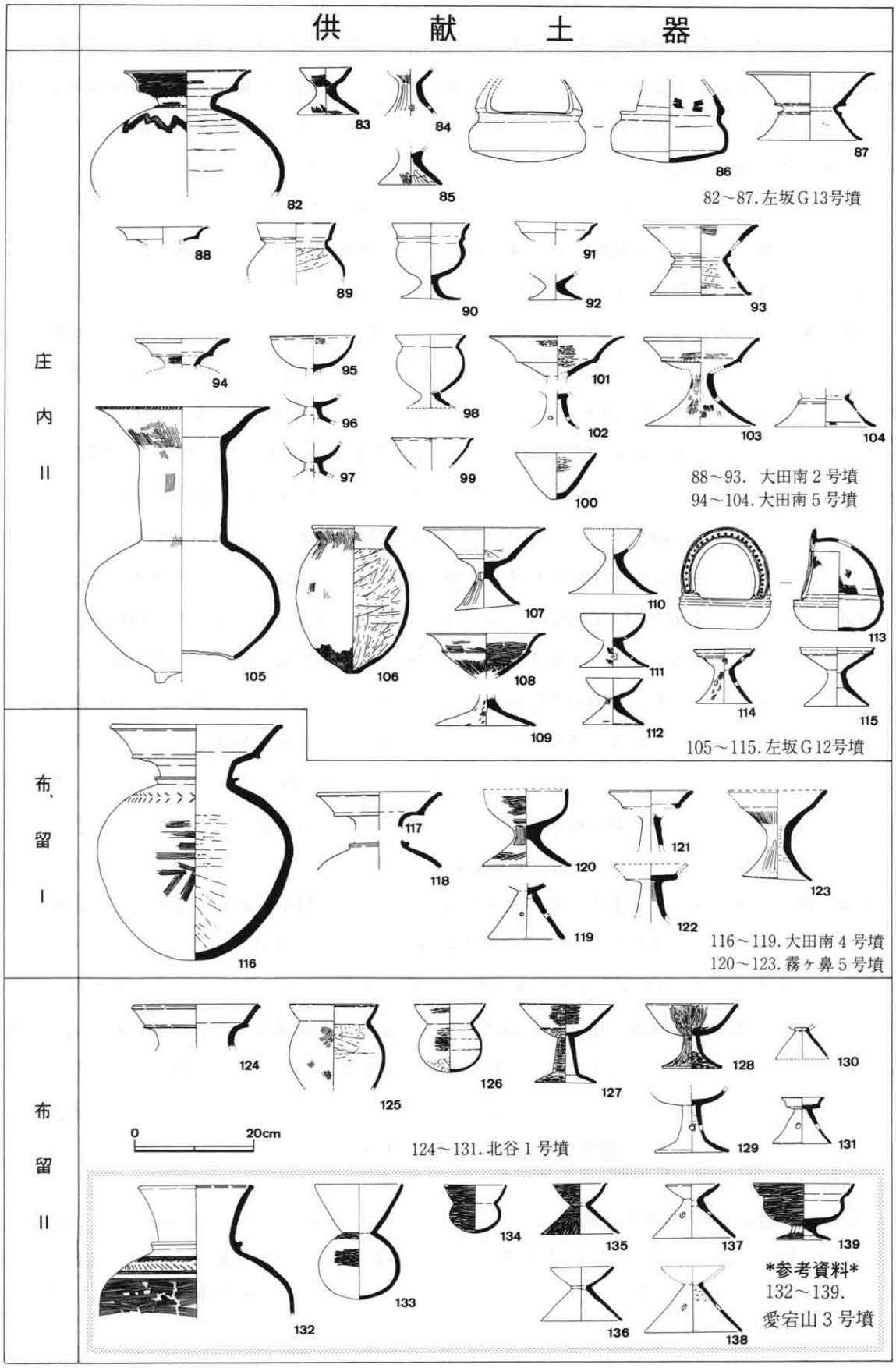
第12図　編年試案(2)

擬凹線文土器様式の確立期といえる段階である。Ⅱ期の大山墳墓群出土の主要型式と、Ⅳ期の台状墓群でみられる型式との間の過渡的様相を示す土器群を、一段階として積極的に評価したものである。大宮町正垣遺跡ＳＤ05出土資料[注24]を基準資料とする(第11図)。なお、岩滝町大風呂南１号墓出土資料などは、この段階に帰属する可能性が高い[注25]。Ⅲ期は、新たに、擬凹線文を施す広口壺が出現し、壺の主体が、長頸壺から広口壺へと大きく変化する。擬凹線文は、第11図のように、広口壺や台付鉢等多くの器種に広がる。器台は、胴部が引き締まり、受部径が裾部径を大きく上回る。胴部中位から上半にかけての位置で、傾斜変換点が認められるようになり、口縁端部が下方に垂下するもの(第11図14)が現れる。甕は、前段階に引き続き、擬凹線文を施すタイプでは、口縁部が垂直あるいは斜め上方に立ち上がり(第12図37・38)、同様な形態で、端面にナデを施すもの(第11図11)が新しく加わる。また、上下に拡張し、端部を跳ね上げる甕(第11図10)や、端部に面をなし、ナデを施す甕(第11図12)も、前段階に引き続き認められる。

弥生後期Ⅳ期　Ⅳ期は、擬凹線文の土器様式の発展期であり、高杯などの一部の型式を除き、ほぼすべての器種に発達した擬凹線文が施される段階である。墳墓では、野田川町西谷墳墓群１号墓[注26]、峰山町金谷１号墓第12主体部、大宮町帯城墳墓群、網野町浅後谷南１号墓、弥栄町太田４号墳下層土壙１[注27]などの資料が該当する。集落遺跡では、網野町林遺跡２号住居跡[注28]出土資料をあげることができる。後期Ⅳ期は、擬凹線文高杯(第12図51)および擬凹線文器台(53)の型式が定形化し、供献土器の組成では主体となる。器台は受部が大きく外反し、受部端部が上下に拡張する。また、装飾器台(52)や山陰および吉備の影響の強い特殊壺(41・42・57)も、この段階に特徴的な器種である。Ⅳ期は、Ⅱ期から続くワイングラス状台付壺(47)を含む西谷１号墓の一括資料が、Ⅳ期の中でも古い一群としてとらえられる。小形台付壺(57)については、西谷には含まれず、擬凹線文を施す小形壺(43・44)が、これに対応するとみられることから、その展開は、Ⅳ期でもやや新しいものであろう。浅い椀状の高杯(55・58)も杯部の立ち上がりが、浅くなるのは、新しい傾向である。擬凹線文の高杯は、口縁部形態の個体差が大きいが、脚部は、スカート状にゆるやかに広がるもの(51)から、細い柱状部をなし、裾部で大きく「ハ」の字状に開くもの(60)へと、新古を指摘できる。

庄内Ⅰ期　従来の編年研究において、特に問題となってきたのは、庄内併行期の土器群に対する認識であった。丹後地域では、庄内併行期は大きく二期に分けられ、前半のⅠ期は、北陸の月影式の強い影響のもとに、在地の土器様式が、変容・崩壊する段階として位置づけられる。後半のⅡ期は、主に畿内庄内系の土器群が、主要型式を構成する段階である[注29]。庄内Ⅰ・Ⅱ期は、弥生時代後期の土器様式から、布留式への過渡的状況を示しており、独立した一様式として、設定を行うものではない。

Ⅰ期古相は、擬凹線文の施文が、前段階同様、広く認められる。しかしながら、細部の手法をみると、特に口縁部は、薄く斜め上方へと拡張する傾向が顕著で、型式自体も月影式の影響を強く受けたものが主体となり、前段階の在地の独自性の強い型式群とは、大きく異なる内容となっている。基準資料となる加悦町白米山北１号墳[注30]の資料では、搬入品の加飾壺[注31](62)に、北陸系の擬


供　献　土　器
庄内II
布留I
布留II
82～87.左坂G13号墳
88～93. 大田南2号墳
94～104.大田南5号墳
105～115.左坂G12号墳
116～119.大田南4号墳
120～123.霧ヶ鼻5号墳
124～131.北谷1号墳
0
20cm
参考資料
132～139.
愛宕山3号墳

第13図　編年試案(3)

凹線文を施す壺(63)と器台(67)が含まれる。Ⅰ期新相は、野田川町内和田ＳＸ05を基準資料とする。この時期は、北陸の影響が、引き続きみられるが、山陰系(78)など、他系統の土器が混在し、後続性のない折衷的な土器(69)がみられる。古相において、広範な器種にみられた擬凹線文の施文は、この段階のうちにほぼ終息する。内和田ＳＸ05の資料では、前段階まで、高杯の主体であった長脚の擬凹線文の高杯にかわり、Ⅱ期以降、高杯の主体となる椀状の杯部をなす小形高杯が(75)が認められる点は注目されよう。また、幅の広い口縁部が、筒状に立ち上がる北陸系の壺(71～73)や、脚部に段をなす高杯(81)、受部径に比して裾部径が小さく、受部が大きく外反する器台など、北陸系の影響がなお色濃い。

庄内Ⅱ期　前段階にみられた北陸系の要素の強い土器群に変わって、畿内庄内系の土器群が組成の基本型式を占める段階である。墳墓出土資料では、大宮町左坂Ｇ13号墳、同Ｇ12号墳[注32]、弥栄町大田南２号墳、同５号墳が該当する。新たな器種としては、鼓形器台(第13図87・93・104)、杯部が屈曲して大きく開く高杯(101・102・103)、東海系器台の系譜を引く中空の小形器台[注33](83・84・114・115)があげられる。小形器台、手焙形土器ともに、左坂Ｇ13号墳(83・84)→左坂Ｇ12号墳(114・115)の新古が指摘できよう。甕の型式には、布留系甕が含まれず、加飾二重口縁壺や手焙形土器、椀状の杯部をなす小形高杯などの畿内庄内系の土器群が、主たる型式となる。

布留Ⅰ期　山陰系布留式の土器型式が、顕在化する段階であると同時に布留系甕が導入され、甕の基本型式となる時期である。布留Ⅰ期は、弥栄町大田南４号墳、野田川町霧ヶ鼻５号墳[注34]の出土資料が該当する。大田南４号墳の山陰系二重口縁壺(116～118)は、前段階の大形器種の系譜を変えるもので注目される。肩部に綾杉文が入る二重口縁壺は、頸部に明瞭な屈曲がみられ、細い突帯をもつ、このタイプとしては、最古式の山陰系二重口縁壺である。小形器台(119)は、裾部が直線的に広がるタイプで、布留式初頭に盛行する中実の畿内系小形器台とみられる。器台のなかでも、平坦な杯部に短く立ち上がる口縁部をなすもの(121・122)が、この段階から認められる。

布留Ⅱ期　布留Ⅱ期は、布留式の基本組成がほぼ完成される段階であり、定形化する段階とみておきたい。最も大きな変化は、布留式の基本組成である「Ｘ」形小形器台(130・135・136)と定形化した小形丸底壺(134)が、小形供献器種の主要な型式になることであろう。基準資料としては、久美浜町北谷１号墳[注35]の一括資料をあげられる。また、表採資料である加悦町愛宕山３号墳の資料は、一括性が高いとされるもので[注36]、型式的にも違和感はない。愛宕山資料は、Ⅱ期のなかでも、北谷に先行する一群としてとらえて良いものであろう。高杯の型式では、脚部が屈曲して開く畿内系高杯(127)および山陰系高杯[注37](128･129)が基本形式となる。

小稿は、「古墳成立期の副葬品の研究」というテーマで、平成７年度当センター共同研究事業に採択された共同研究の成果である。前半の墳墓と葬送儀礼については野島が、後半の供献土器については野々口が執筆し、協議の上、文体を調整した。もちろん、担当両者の意見の相違を含めた論理矛盾など、未だ解決し得ない問題を多く内包している。調査経過の覚え書きとし、今後の研究課題としたい。

（のじま・ひさし＝調査第２課調査第４係調査員）
（ののぐち・ようこ＝調査第２課調査第３係調査員）

平成11年度発掘調査略報

33. 今井城跡・赤坂今井墳丘墓

所 在 地　中郡峰山町赤坂小字今井・ケビ

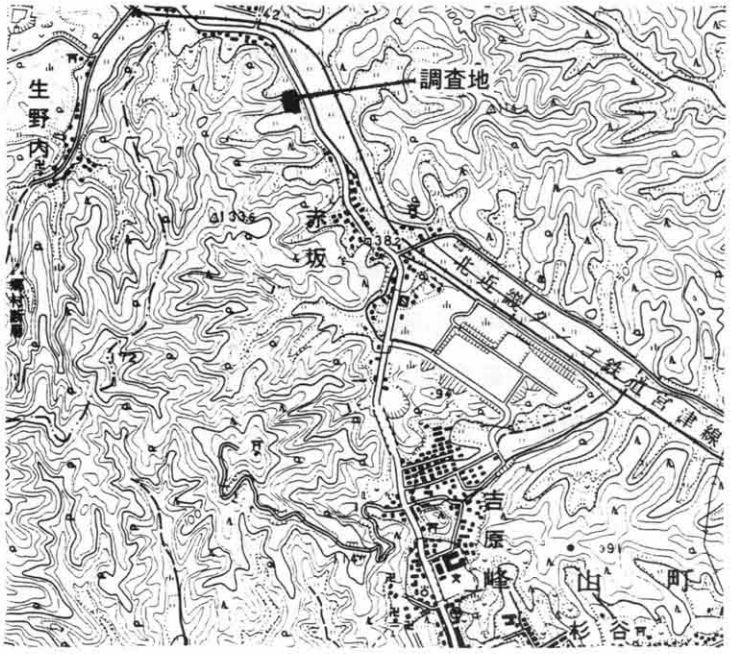
調査期間　平成11年5月25日～平成11年9月29日

調査面積　約1,200m²

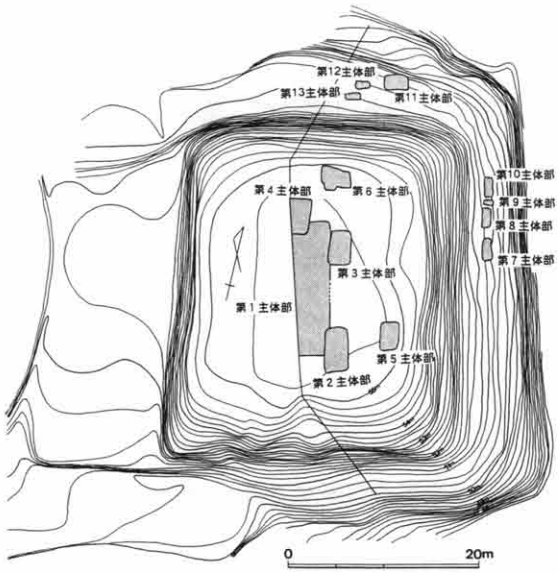
はじめに　今回の調査は、主要地方道網野峰山線交通安全施設等整備事業に伴って、京都府土木建築部の依頼を受けて実施した。

赤坂今井墳丘墓・今井城跡は、標高55mを測る丘陵先端部に位置している(第1図)。現在、府道となっている東側の街道は、古来からの交通路として重要で、街道沿いには多くの遺跡が存在している。弥生時代と古墳時代の主な遺跡として、網野町浅後谷南遺跡・浅後谷南墳墓、峰山町古殿遺跡・カジヤ古墳・湧田山1号墳、弥栄町大田南古墳群などがある。さらに周辺には石丸城跡・赤坂城跡・吉原山城跡・峰山陣家跡など、中世以降の山城も存在している。

調査概要　赤坂今井墳丘墓は、整った方形の墳形で、南北約37.5m・東西約32.5m・高さ約3.5mを測る　。また墳丘周囲には幅5～6mの平坦面がめぐり、墳丘をより明確にしている(第2・3図)。墳丘の造成は背後の尾根を削って溝を掘削し、その時にできた土を盛って形を整えている。埋葬主体部は、墳頂部で6基、周囲の平坦面で7基の合計13基を検出した(第2図)。なお、主体部の調査は、現状保存のための協議が進められたため(現在も継続中)、掘削したのは周囲の7基(第7～13主体部)と墳頂部の2基(第2・3主体部)のみである。注目されるのは、墳頂部中央に構築された最も古い第1主体部である。検出面で南北約14m・東西4m以上を測る。この第1主体部を若干壊して造られているのが、第2・3・4主体部である。掘削の結果、第2主体部では舟形木棺、第3主体部では組合式箱形木棺



第1図　調査地位置図(1/25,000)



第２図　墳丘測量図および主体部配置図

第３図　赤坂今井墳丘墓全景

の痕跡を確認した。遺物として、それぞれの棺内から鉇が１点ずつ出土した。さらに第３主体部の墓壙の二段目肩部から、甕形土器(弥生時代後期末)も出土した。周辺の７基には、舟形木棺(第８主体部)、組合式箱形木棺(第７・10～12主体部)の棺痕跡をもつもの、棺痕跡のない土壙墓(第９・13主体部)などがある。遺物は、いくつかの棺内外から出土した鉇・短刀・鉄鏃・弥生土器がある。

今井城跡は、赤坂今井墳丘墓の地形をほとんどそのまま利用して築かれている。頂部平坦面および周囲の曲輪、墳丘墓の溝を利用した堀切など、山城としての機能を備えている。頂部には大小の柱穴痕や竪穴状遺構などがあり、周囲をとりまく柵、櫓状の建物が復原される。出土遺物には、室町時代の土師器皿や中国製陶磁器などがある。

まとめ　今回の調査で、赤坂今井墳丘墓は、１辺40m近く、高さ３ｍを測る方形墳丘墓で、弥生時代後期としては、国内最大級のものであることが判明した。また、合計13基の埋葬主体部のうち、特に墳頂部中央を占める第１主体部は、長辺14m・幅４ｍ以上と、当該期のものとしては国内最大の規模をもつ。築造時期は第３主体部から出土した土器などから、弥生時代後期末(３世紀中葉)と考えられる。この時期、方形墳丘を伝統的に採用している丹後地方の墓制は、出雲や北陸のみならず畿内中心地域とも異なる、独自の政治領域を形成していたことを示唆している。また、中心主体部の被葬者は当地の農業生産のみを基盤にせず、むしろ幅広い地域と交流をもつことにより勢力を得た首長の一人であろう。丹後地方の墓制や政治史を研究するための貴重な資料を追加したといえる。

(黒坪一樹)

34. 吉沢（よっさわ）城跡

所 在 地　竹野郡弥栄町字吉沢

調査期間　平成11年５月18日～6月16日（試掘）・８月18日～9月29日

調査面積　約800m²

はじめに　この調査は、丹後国営農地開発事業に伴い、農林水産省近畿農政局の依頼を受けて実施した。吉沢跡は、弥栄町字吉沢小字城山に所在する早尾神社境内を中心とした戦国時代の城跡である。城跡は神社本殿がある標高68mのやや広い平坦地（本丸）と、その南に同じ標高の平坦地があり、それより下にこれらを取り巻く曲輪群が造られている。天正10（1582）年に細川氏と一色氏の攻防で吉沢城に拠ったのは、一色氏の武将松田遠江守と後藤下総守であったといわれ（『丹後旧事記』）、戦いは一色方の敗北に終り、吉沢城は廃城となったと推定されている。

調査概要　今回の調査対象地は、吉沢城跡の東側曲輪の一部と、その東方の谷筋を開削した場所で、城跡に関連する施設が想定される地域である。試掘調査を実施したところ、西側で犬走り状遺構（通路）・平坦地が、東側で土坑や柱穴群、急斜面（人工的に切り落とした崖）に沿う溝跡（排水溝）を、中央部で深さ２m前後の流路跡（谷地形）を検出した。東側平坦地では、円形・隅丸方形の土坑、多数の柱穴、排水溝、円弧状に曲がるテラス状遺構（床面を平坦に削平したもの）を検出した。土坑・テラス状遺構などから、輸入陶磁器・瓦質土器が出土した。西側では、北部土坑群・南部土坑群、犬走り状遺構、テラス状遺構、排水溝を検出した。テラス状遺構の北西隅は、ほぼ直角で、浅い排水溝がめぐる。土坑のひとつから、銭貨が合計10枚出土した。北部土坑群と南部排水溝の間に多数の柱穴を検出しており、吉沢城に関連する建物があったと推測される。

まとめ　この調査で、テラス状遺構・犬走り状遺構・溝跡（排水溝）・土坑・柱穴などが検出された。出土土器は、瓦質すり鉢・天目茶碗・土師器皿・輸入陶磁器などで、16世紀後半の時期のものがほとんどである。吉沢城は、この時期に拡張・整備されたと推測される。周辺地形から吉沢城跡は竹野川を望む西側に急崖を設け、北側に広い谷と小川があり、この小川を外堀として利用したと推測される。広い谷から南に入り込んだ今回の調査地の谷入り口に、大手口（木戸）を想定できる。南側は現況では明確な堀切などが残っていない。今回の調査では、城の一部が明らかになり、丹後の戦国時代の城の解明に貴重な資料が得られた。

（石尾政信）

調査地位置図（1/50,000）

35. 五十河（いかが）遺跡

所 在 地　中郡大宮町字五十河

調査期間　平成11年５月11日～８月12日

調査面積　約1,500㎡

はじめに　今回の調査は、府営ほ場整備事業に伴うもので、京都府丹後土地改良事務所の依頼を受けて実施した。五十河遺跡は、丹後半島を貫流する竹野川の上流域に位置する。調査地は、竹野川東岸に張り出した小尾根の先端部にあたる。今回は、近接する２地点で調査を行った。

調査概要　今回の調査で検出した遺構の主なものは、柱穴と考えられる多数のピット・土坑・溝などである。土坑は、平面長方形で、石を敷いた状態のものや集石があるものもある。これらの土坑の性格は不明であるが、その形態から、墓の可能性も考えられる。これらの土坑からは、12世紀末～13世紀初頭頃の土師器皿・瓦質鍋などが出土した。付近に、土坑群を方形に囲んでいたものとも考えられる溝があり、土坑と同時期の土器が出土している。土坑を墓と考えると、周囲を溝で囲まれた墓地が復原できる。切り合い関係からピットの方が土坑に先行している。ピットの時期を示す遺物として多数の黒色土器や糸切り底の土師器皿・中国製の玉縁口縁の白磁片が出土しており、12世紀頃のものと考えられる。

第１図　調査地位置図(1/100,000)

このほか、古墳時代中期末から後期にかけての竪穴式住居跡２基を検出した。いずれも断片的にしか残っておらず、規模などは不明である。平面形は方形を呈するものとみられる。また、縄文時代の石錘や石匙などの石器や剥片、縄文土器片が出土している。

まとめ　今回の調査では、平安時代を中心とする時期の遺構を多数確認した。丹後地域でこの時期の集落跡の調査例は少なく、丹後地域の平安時代を考える手がかりとなる遺跡と言える。また、縄文時代の土器片や石器が出土しており、縄文時代の遺跡が存在する可能性が考えられる。

（引原茂治）

第２図　検出土坑

36. 福知山城跡（ふくちやま）

所 在 地　福知山市岡ノ一町ほか

調査期間　平成11年７月26日～年９月29日

調査面積　約300m²

はじめに　今回の調査はＪＲ山陰本線の連続立体交差事業に伴う事前調査として、京都府土木建築部の依頼を受けて実施したものである。調査地は明智光秀が丹波平定の後築城した福知山城内の庭園に当たる場所で、現存する古絵図には「御泉水」という名称とともに、池や築山が描かれている。

調査概要　今回の調査では江戸時代の福知山城に伴う庭園遺構と、弥生時代の遺物包含層を検出した。

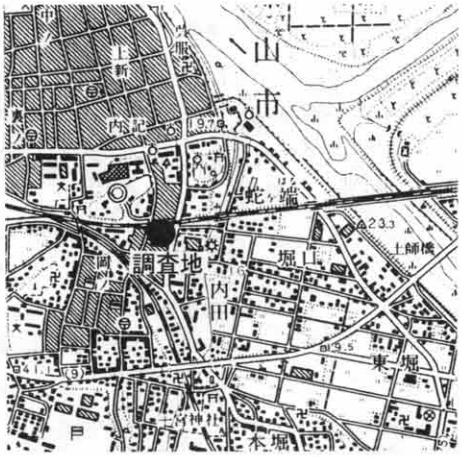
①庭園遺構　調査区のほぼ中央で、地表下約2.2～2.5mの地点から板石を敷き詰めた板石敷遺構を検出した。この遺構は南西と北東部に石の無い部分があり、調査区の中央部で屈曲する部分では南北両側に石の無い部分があるため、道状の遺構であることが判明した。さらにこの地点が「御泉水」と呼ばれる庭園跡であることを考え合わせると、回遊式庭園の園路に当たるか、絵図に描かれている池の岸に配置された石であると考えられる。なお、この板石敷遺構の上には黒色の玉砂利が敷かれており、庭園の修築の際に砂利敷きの園路に作り替えられていると考えられる。玉砂利の上には黒灰色のシルトが堆積している。

②遺物包含層　板石敷遺構の下部には暗褐色粘土層が40cmほど堆積しているが、この下層に暗灰褐色粘土層が堆積している。この層から１点のみ弥生時代の土器片が出土している。小片のため、詳しい時期を特定するのは困難である。遺構に伴うものではないが、この付近に弥生時代の遺跡があることを示唆している。

③出土遺物　砂利敷きの上部の黒灰色シルト層からから丹波焼の甕、徳利、伊万里焼の瓶、などが出土している。18世紀後半を中心に焼かれたものである。

まとめ　今回の調査により、近傍に調査事例の無かった福知山城跡の遺構面の高さを把握できたことは、今後の福知山城跡の調査に貴重な資料を提供することとなった。残存する遺構は福知山城の庭園「御泉水」に伴う板石敷きの園路または池岸の石材であり、その時期は18世紀を下限とする江戸時代中期のものと考えられる。

（福島孝行）



調査地位置図(1/50,000)

37. 東山遺跡（ひがしやま）

所 在 地　北桑田郡京北町周山

調査期間　平成11年７月22日～平成11年９月17日

調査面積　約500m²

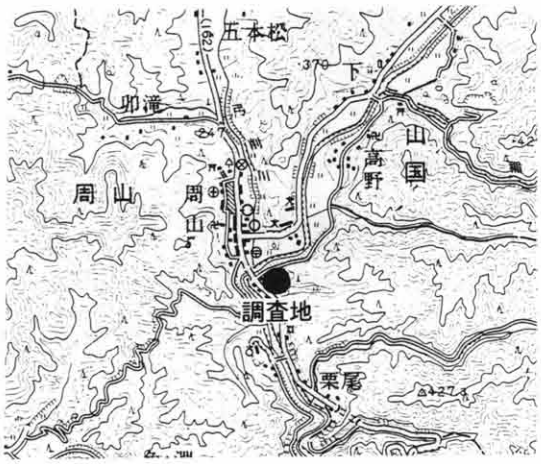
はじめに　今回の発掘調査は、国道162号周山バイパス建設工事に伴い、京都府土木建築部の依頼を受けて実施した。東山遺跡は、弓削川と桂川の合流点に近接した丘陵上にある。桂川を挟んだ北側の周山中学校の敷地と丘陵にかけて、飛鳥時代後期～鎌倉時代に営まれた府史跡周山廃寺があり、この丘陵上には周山古墳群や高梨経塚も立地する。

調査概要　今回の試掘調査では、合計６か所のトレンチを設けたが、調査地全体の基本的な土層堆積状況は、水田耕作土を表土とし、その下層に黒ボク層を挟んで、遺構検出面となった黄褐色粘土層が基盤を形成する。遺構の検出面までの深さは、調査個所によって起伏が認められるが、遺構密度の高い第１トレンチ周辺では表土下30～80cmで各時代の遺構を検出している。

第１～第３トレンチで遺構の広がりを確認した。第１トレンチからは古墳時代の竪穴式住居跡２基、土坑２基、柱穴多数が検出されている。竪穴式住居跡の１つは、東隅から煙道状の溝が外に延びる特徴を持つ。旧石器時代の石器が、１点のみであるが、古墳時代の遺構検出面である黄褐色粘土層から出土している。石器の広がりを調べるため下層の掘削をしたが、石器の出土層は確認できなかった。出土遺物には、鎌倉時代の瓦器椀・土師皿、奈良・平安時代の須恵器・平瓦、古墳時代の土師器・須恵器・滑石製模造品、旧石器時代の石器がある。第２トレンチからは古墳時代の土坑が１基検出されている。注目すべき出土遺物に古墳時代の韓式系土器がある。第３トレンチでは中世のものと考えられる柱穴群が検出されている。

まとめ　今回の調査によって旧石器時代～中世の複合遺跡であることが確認できた。また、現在の地形は平坦であるが、本来は起伏に富むことがわかり、谷部（鞍部）では遺構が検出できなかった。検出遺構では、古墳時代のものが多く、特に住居跡や包含層からは、古い須恵器や韓式系土器が発見されており、対岸の周山古墳群との関係が注目できる。今回確認できなかったが、今後の調査において、旧石器時代の石器の本来の出土層が遺跡内に存在するか否かを留意する必要がある。

（中川和哉）



調査地位置図（1/50,000）

38. 算用田遺跡（さんようでん）

所 在 地　乙訓郡大山崎町円明寺小字井尻地内

調査期間　平成11年７月14日～８月11日

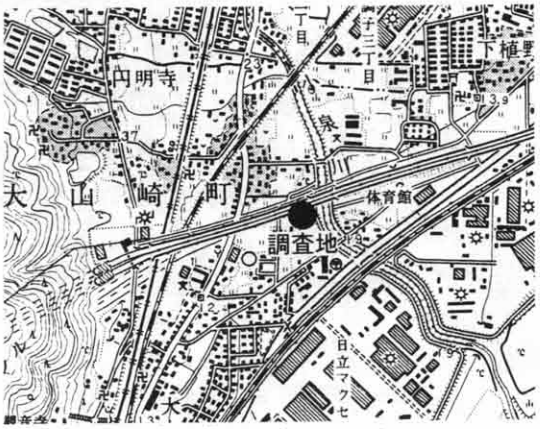
調査面積　約120㎡

はじめに　算用田遺跡は、桂川の支流である小泉川の河口から約１km上流の右岸に立地する遺跡である。今回の調査は、名神高速道路大山崎ジャンクション建設に伴い、道路本線への合流車線が当遺跡にかかるため、事前に実施したものである。一連の調査は昨年度から実施しており、今回はその東延長部が対象になった。

調査概要　調査地は、路線幅10m前後の狭長な土地で、これを横断する農業用水路を境に東西に２か所のトレンチを設定して遺構の確認にあたった。その結果、比較的安定した遺構面は地表下３m付近に位置するため、トレンチは数段の段掘りを行ったため、検出面は極く限定された範囲にならざるを得ず、面的な確認は十分行い得なかった。調査地の基本層序は、上位より１.現耕土もしくは竹薮の土入れ層、２.中～近世に形成された耕地造成土、３.平安時代前期の遺物包含層、４.古墳時代後期の遺物包含層、５.シルト質～砂礫質の池沼～河川堆積層となる。比較的安定した文化面は３・４層下面に存在し、その標高はおよそ10.8mと10.6mにある。上層の平安期の遺構は、調査区の東寄りに遍在し、小規模な溝や建物としてまとまらない柱穴、浅い土坑などである。西側の調査区ではこの時期、池沼状の粘質土が堆積しており、顕著な遺構はなかった。４層下面では、上縁が直線的なラインを描き底部が平坦な浅い土坑(竪穴式住居跡か？)と、緩く円弧を描いて東西流する浅い溝状遺構を検出した。なお、下層遺構の基盤となる５層から弥生～布留式段階の土器が若干出土したが、この時期の遺構面は確認できなかった。

まとめ　今回の調査は極めて限られた範囲にとどまったが、古墳時代と平安時代前期の遺構面の存在を確認した。ただ、検出した遺構は、伴出遺物が少ないこと等から、その性格を明らかにするには至らなかった。また、前回の調査で指摘されていた条里の坪界線については、幅３mの溝としてその痕跡を確認したが、２層をベースにしており、古代に遡らないことが判った。

（伊賀高弘）



調査地位置図(1/25,000)

39. 稲葉（いなば）遺跡第５次

所 在 地　京田辺市田辺久戸２丁目

調査期間　平成11年７月７日～８月６日

調査面積　約290m²

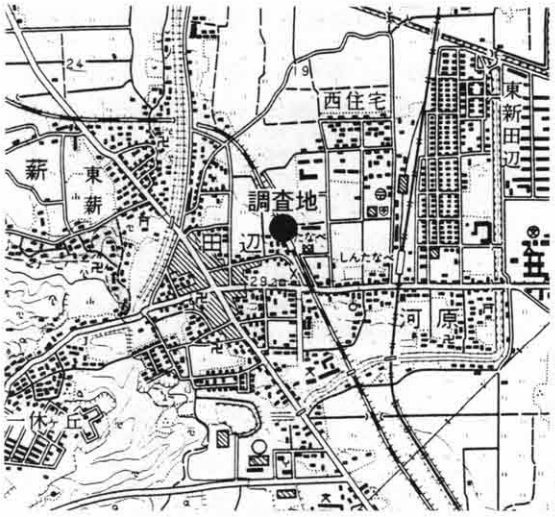
はじめに　稲葉遺跡は、西日本旅客鉄道株式会社（ＪＲ西日本）京田辺駅西側から近鉄新田辺駅西側まで、東西約550m、南北約950mにわたって広がる遺跡である。稲葉遺跡ではこれまでに４次の発掘調査が行われているが、京都府田辺総合庁舎建設に伴って行われた第１次調査で時期不明の溝状遺構が検出され、ショッピングセンター建設に伴って行われた第４次調査で弥生時代の方形周溝墓が検出されているほかは、顕著な遺構は認められない。

今回の調査は、ＪＲ西日本の片町線輸送改善計画による京田辺駅改良工事に伴って、駅舎の北側に、下り線プラットホームに平行して南北約60mの細長い調査区を設定する予定で掘削を開始したが、調査区北端から約20m付近で埋設管が調査予定地を横断していることが判明したために、この部分の掘削を中止し、埋設管より北側（１区）と南側（２区）の２つの調査区に分けて調査を行った。

調査概要　１区全体と２区の北東部分は、かつて利用されていた引き込み線とプラットホームの土留め工によって削平されており、遺構面はまったく残っていなかった。一方、２区の西辺部分と南部では遺構面が残っており、南北方向の耕作溝群とピット４基を検出した。耕作溝群の方向は調査地周辺に広く認められる方格地割りの方向と一致するが、地割りの成立時期を示す資料は得られなかった。また、ピットには、相互に関連の認められるものはなく、建物跡などを復原することができないが、古墳時代の包含層より下層に対応する面で検出されたものがあることから、古墳時代以前の遺構である可能性が高い。

出土遺物は小さな破片が多いが、古墳時代の包含層から土師器・須恵器などが、２区南部の耕作溝群から信楽焼鉢などが出土した。

まとめ　今回の調査区は遺構面に達する削平を受けている部分が多かったが、南端付近は遺構面が良好に残っており、鉄道敷設前の地割りを反映した耕作溝群やピットなどが検出されたことから、さらに南側では、坪境溝や建物跡が検出される可能性が考えられる。



調査地位置図（1/25,000）

（森島康雄）

40. 三山木（みやまき）遺跡第２次

所 在 地　京田辺市三山木

調査期間　平成11年５月17日～10月28日

調査面積　約1,800㎡

はじめに　この調査は、綴喜都市計画事業三山木地区特定土地区画整理事業に伴い、京田辺市の依頼を受けて実施したものである。

当遺跡に関連する調査としては、平成９年度に京田辺市教育委員会が区画整理事業対象地の試掘調査を行っている。その結果、三山木山崎の低丘陵地ならびに周辺部から、弥生時代前期から鎌倉時代にかけての遺物が出土した。遺構は、弥生時代中期の土坑・溝、奈良・平安時代の掘立柱建物跡・溝などが確認されている。また、遺跡南端部にあたる、低丘陵地南側において市教委による発掘調査が実施された(第１次調査)。なお、北方約200mには奈良時代から平安時代にかけての掘立柱建物跡や溝跡などを検出した二又遺跡が広がる。

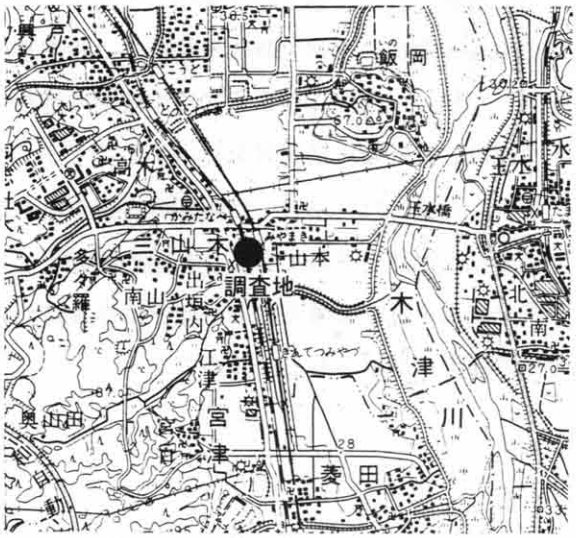
調査概要　試掘調査結果をもとに、６か所の調査区を設定した(第２図)。

(1)土層

調査区が東西方向に並ぶことから、低丘陵部から東方への土層堆積状況、ならびに遺構面を把握することができた。

弥生時代前期・中期は、三山木山崎に舌状に張り出す低丘陵部が３トレンチ方向に延び、一部４トレンチにも延びていた。２トレンチ付近は小さな谷地形を成していた。今回出土した弥生時代前期から中期の土器は、この谷部から出土したもので、地表下約２mの黒色粘質土に堆積していた。丘陵尾根筋上に関連する遺構が存在すると考える。４トレンチから東側は、川石や砂の堆積が見られたことから、木津川の氾濫域であったと考える。この砂からも弥生土器が出土しているが、磨滅していることから遺構に伴うものではない。

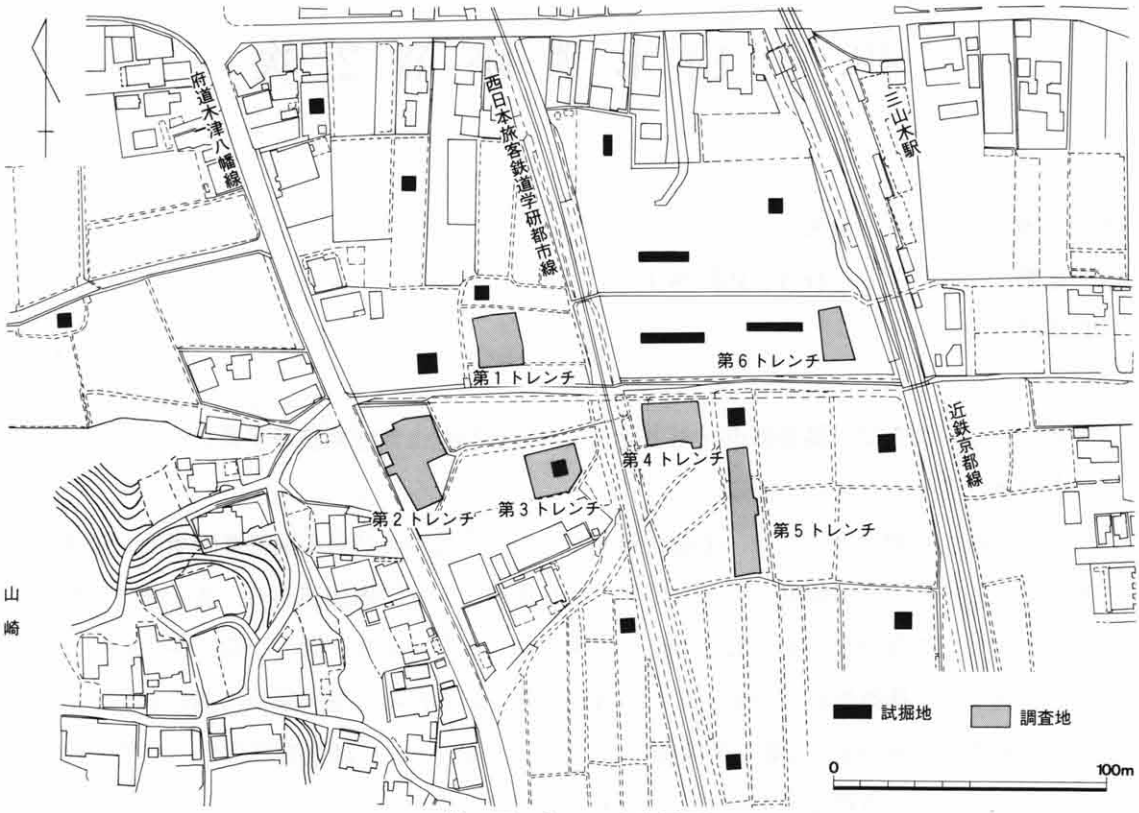
奈良・平安時代になると、丘陵尾根筋の一部を削平し、５トレンチ付近まで微高地が形成されていた。弥生時代の氾濫時に堆積した砂層をベースとしているため、地盤の良好な所とは言えない。



第１図　調査地位置図(1/50,000)

(2)検出遺構

今回の調査で検出した遺構は、弥生時代中期



第２図　トレンチ配置図

の土坑・奈良時代の掘立柱建物跡・奈良時代から平安時代にかけての溝跡と井戸などである。弥生時代中期の土坑については、長辺２ｍ・短辺1.3ｍ・深さ約0.4ｍを測る。確認した土坑は１基であったが、調査地が丘陵縁部にあたることから、尾根筋上にあたる南側隣接地に遺構が広がると考える。奈良時代になると遺構は５トレンチ付近に集中する。北側隣接地内で試掘調査した際にも掘立柱建物跡が確認されていることから５トレンチから北側にかけて奈良時代の遺構が広がると考える。

まとめ　今回の調査成果としては、弥生時代前期から中期前半にかけての土器の出土である。南山城地域において弥生時代前期の土器出土例としては、京田辺市の宮ノ下遺跡や、相楽郡木津町の燈籠寺遺跡が、弥生時代中期前半は相楽郡山城町の涌出宮遺跡や、相楽郡精華町の畑ノ前遺跡などが知られる。このようにこの時期の遺跡は希薄であることから、今回の調査で出土した弥生土器は、良好な一括資料を提示することができたと考える。

また、奈良時代においては現在の府道木津八幡線付近を山陽道が南北に通り、山本駅がこの近くにあったと想定されている。今回の調査では道路状遺構の検出には至らなかったが、二又遺跡の調査成果を併せて考えると、徐々に奈良時代から平安時代にかけての遺構が確認されつつある。今後の調査に期待されるところである。

（岡崎研一）

府内遺跡紹介

86. 広沢古墳

古墳時代に生きた京都の人々は、いったいどんな顔をしていたのであろうか？その手がかりとなる写実的な資料は、古墳の周囲に樹立された人物埴輪である。この府内遺跡紹介でも紹介した京田辺市堀切６号墳や丹波町塩谷５号墳は、代表的な京都人の顔である。また、最近では、円筒埴輪にヘラ書きされた人物像が知られており、京都市黄金塚２号墳の耳飾を付けた人物や、向日市寺戸大塚古墳の埴輪に描かれた、入墨を施した人面と見られるものも記憶に新しい。中国の歴史書である『魏志倭人伝』では、このような入墨を『鯨面文身』と呼んでおり、倭人の特異な習俗としてよく知られている。ここで紹介する広沢古墳出土の石偶は、古墳時代終末期の人物の容貌を知る格好の資料であるだけでなく、資料的にも非常に珍しいものである。

広沢古墳は、広沢池の南、京都府立堀川高等学校のグラウンド内に存在した小規模な円墳である。この古墳はグラウンドの改修工事にともなって、埋葬施設である横穴式石室が発掘調査された。石室は、奥壁付近が破壊され、床面まで荒らされていたので、遺物の大半は失われていた。棺は組合式石棺の破片が検出されたが、部位が分かるものは縄掛突起の一部のみである。石偶は、石棺の側石あるいは底石を加工して、顔を作り出す。大きさは、縦24cmの楕円形の顔を掘り出し、杏仁形の目、ゆがんだ鼻、大きく結んだ口を表現する。胴部以下はない。それ以外の遺物には、須恵器・土師器・古銭・鉄斧が見られる。古銭には隆平永宝・富寿神宝があって、平安時代に石室は再利用されたようである。古墳の築造時期は、出土須恵器と石棺蓋の型式から、７世紀前半に１点が押さえられ、嵯峨野地域の首長墓で最も新しい時期に位置付けられる。

この、石偶は明確な共伴遺物(須恵器など)が無いために、詳細な時期の決定をすることができない。ただ、石偶の容貌の様式から飛鳥地域の終末期古墳に樹立された石像との類似が、報告者である樋口隆康氏によって指摘されている。また、山田邦和氏はこれを中世以降の石仏信仰に伴うものとしている。いずれかは決め手に欠けるので、顔にちなんだいくつかの考古学的な話題を提供しようと思う。

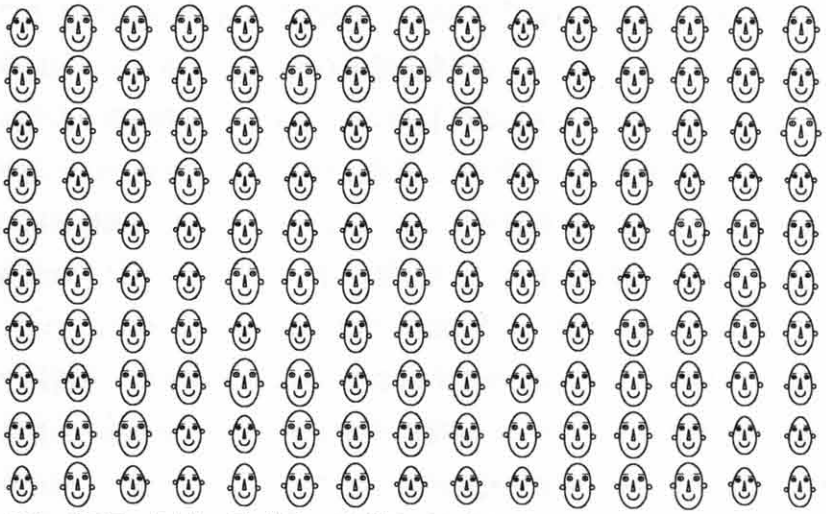
第１図　遺跡の位置

私たちは、毎日、多くの人たちの顔を見て暮らしており、顔は人間を最もイメージしやすいものである。先日、東京大学総合博物館で実施された、ネアンデルタールの復原プロジェクトでは、シリアのデデリエ洞窟から発掘調査されたネアンデルタール人

の幼児人骨の容貌が復原された。近年、日本でも天理市長寺遺跡の弥生時代人の容貌が復原されたほか、世界史上、著名な人物の顔も古人骨学との強調によって成果が挙げられつつある。マケドニアのアレクサンドロス大王の父王フィリッポス二世は、戦争中敵の矢に当たり、右目を失明、生涯そのことに触れられるのを極度に嫌ったという歴史家の記録があるが、ギリシァのヴェルイーナ王墓で黄金の蔵骨器に入れられた火葬遺骨は、生前、顔面右半分にひどい外傷を受け、治癒したことが判明したという。伝世する絵画や彫刻では、往々に理想化された為政者の姿しか写さない。歴史を復原する上で、顔のもつ役割は大きいのである。

第２図　広沢古墳出土の石偶

最後に余談をひとつ。統計学者チェーノフは、多次元の統計学的データを分析するのに、人間の顔の識別能力に目をつけた。樹形図や散布図に示される解析データを顔で表現しようというわけである。変数の重みを、目鼻立ちなどの特徴的な部分に割り当てなければ意味がないが、無機質な数学的分析の表現が、顔を用いた途端に親しみ深いものになるから不思議である。



凡例：　顔の幅 = がく片，　耳の位置 = がく片幅，　顔の高さ = 花びら，
顔上半分の楕円の離心率 = 花びら幅，

第３図　チャーノフの顔によるフィッシャーのあやめのデータ分析結果

古墳の案内　広沢池の西畔、佛教大学グラウンドと隣接した堀川高校グラウンド内の、バックネット裏の木立の中に小さな祠がある。その中に、この石偶が安置されている。なお、平成11年３月18日(木)の京都新聞朝刊の地域ワイド京都に、「岩石と語らう(85)　広沢古墳の石神」として、この石偶の紹介がある。

参考文献

樋口隆康「京都嵯峨野広沢古墳」(『京都府文化財調査報告』第22冊　京都府教育委員会)　1958
山田邦和『日本の古代遺跡　京都２』　保育社　1992
穴沢咏光「ジョン・プラグ、リチャード・ニーヴ著『法医学・考古学の証拠から顔を復原する』」(『考古学研究』第46巻第２号　考古学研究会)　1999

(河野一隆)

長岡京跡調査だより・71

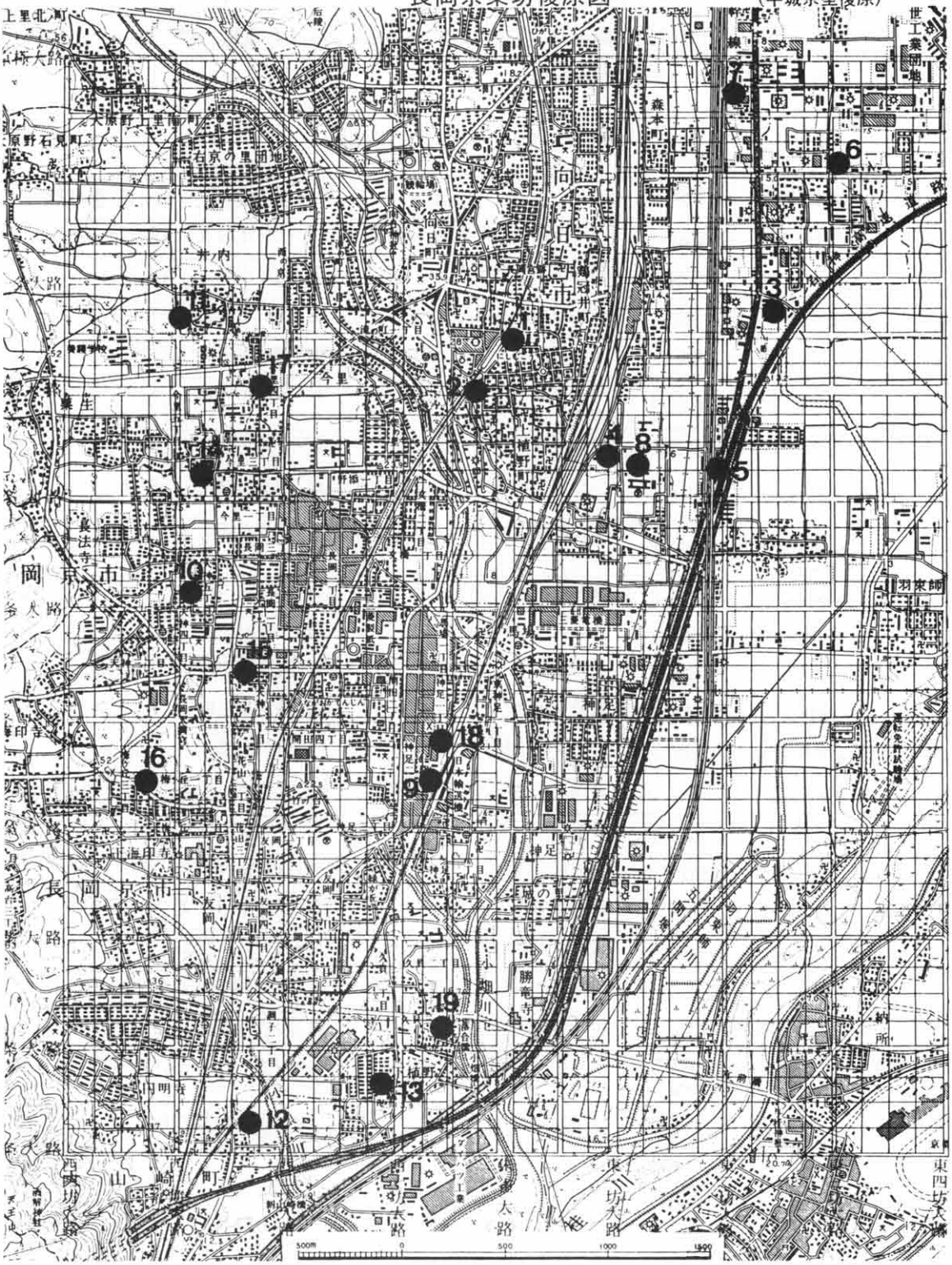
前回の『たより』以降の長岡京連絡協議会は、平成11年８月25日、９月22日、10月27日に開催された。報告のあった京内の発掘調査は、宮内２件、左京域６件、右京域11件であった。京外の８件を併せると27件となる(位置図を参照)。

調査地一覧表(1999年10月末現在)

番号	調査次数	地区名	調　査　地	調査機関	調査期間
1	宮内第331次	7ANEHJ-2	向日市鶏冠井町祓所21-1	(財)向日市埋文	9/27～10/30
2	宮内第383次	7ANFMK-15	向日市上植野南開11-23	(財)向日市埋文	8/3～8/13
3	左京第426次	7ANVKC-2	京都市南区久世東土川町178他	(財)向日市埋文	7/6～7/30.
4	左京第432次	7ANFKD-4	向日市上植野町北ノ田5-1.6	(財)向日市埋文	7/6～7/30.
5	左京第433次	7ANFSK-4	向日市上植野町尻引1-3 柳ヶ町19-4.19-5	(財)向日市埋文	8/3～1/31
6	左京第434次	7ANVHR-3	京都市南区久世東土川町	(財)京都市埋文	9/16～
7	左京第435次	7ANDII-7	向日市森本町戊亥11.17-3.17-4	(財)向日市埋文	9/16～3/下
8	左京第437次	7ANFGB-4	向日市上植野町五ノ坪11-1・2.12-1・2	(財)向日市埋文	10/6～12/下
9	右京第630次	7ANMBZ-2	長岡京市神足二丁目地内	(財)長岡京市埋文	1/27～8/31
10	右京第646次	7ANIOK-3	長岡京市天神５丁目108	(財)長岡京市埋文	7/19～8/17
11	右京第647次	7ANGMB-1	長岡京市井ノ内向井芝4	(財)長岡京市埋文	7/19～8/17
12	右京第648次	7ANQKK-4	長岡京市久貝一丁目301-1	(財)長岡京市埋文	7/21～8/2
13	右京第649次	7ANTMK-10	大山崎町下植野宮脇1-31	大山崎町教委	8/2～8/13
14	右京第650次	7ANINC-10	長岡京市今里五丁目327-2他	(財)長岡京市埋文	8/17～12/27
15	右京第651次	7ANKNZ-11	長岡京市天神一丁目50-2	(財)長岡京市埋文	8/23～10/4
16	右京第652次	7ANKTM-7	長岡京市天神二丁目124-5	(財)長岡京市埋文	9/13～10/5
17	右京第653次	7ANIAE-12	長岡京市今里四丁目210	(財)長岡京市埋文	10/4～11/12
18	右京第654次	7ANMDB-3	長岡京市神足二丁目地内	(財)長岡京市埋文	10/25～3/31
19	右京第656次	7ANMQSE-4	長岡京市久貝117-1他	(財)長岡京市埋文	10/12～11/15
20	寺戸大塚古墳第７次	4PTBSM-7	向日市寺戸町芝山 2-6～13・103	(財)向日市埋文	7/1～10/5
21	向日市立会第99057次	7ANFKW	向日市上植野町桑原12-7・8	(財)向日市埋文	8/9
22	下植野南遺跡	IK-31地区	大山崎町下植野門田地内	(財)京都府埋文	4/12～
23	山崎津跡第14次	7YYS'KD-6	大山崎町字大山崎鏡田2	大山崎町教委	8/3～8/11
24	山城国府跡第55次	7YYMS'RK-17	大山崎町字大山崎小字竜光51-1	大山崎町教委	4/1～7/16
25	山城国府跡第56次	7YYMS'RK-18	大山崎町字大山崎小字竜光67-2	大山崎町教委	8/3～9/20

26	大薮遺跡		京都市南区久世殿城町	(財)京都市埋文研	7/6～00.3/31
27	中久世遺跡		京都市南区久世中久世町4-37	(財)京都市埋文研	7/21～8/2

長岡京条坊復原図　(平城京型復原)



センターの動向(99. 8～10)

1.できごと

8.6　中谷雅治理事、赤坂今井墳丘墓(峰山町)現地視察
　稲葉遺跡(京田辺市)発掘調査終了(7.7～)
　足利健亮理事御逝去

8.10　樋口隆康理事長、木村英男常務理事・事務局長、赤坂今井墳丘墓現地視察

8.11　算用田遺跡発掘調査終了(7.14～)
　五十河遺跡(大宮町)関係者説明会

8.12　五十河遺跡、発掘調査終了(5.11～)

8.14　小さな展覧会開催(8.29まで)

8.18　理事協議会(於：当センター)樋口隆康理事長、中澤圭二副理事長、木村英男常務理事・事務局長、上田正昭、藤井　学、佐原　眞、井上満郎、中谷雅治各理事出席、小さな展覧会視察

8.20　樋口隆康理事長、市田斉当坊遺跡(久御山町)視察

8.22　平安京跡右京一条三坊九・十町(京都市北区)現地説明会

8.25　長岡京連絡協議会

9.1　内田山遺跡(木津町)現地調査開始

9.6　企業内同和問題啓発推進員研修会(於：京都会館)福嶋利範事務局次長出席

9.7　上田正昭理事、赤坂今井墳丘墓現地視察

9.8　佐山遺跡(久御山町)現地調査開始

9.9　埋蔵文化財担当職員等講習会(於：京都大学)久保哲正調査第2課主幹、伊野近富企画係長出席

9.13　瓜生野古墳群(園部町)現地調査開始

9.17　市田斉当坊遺跡現地説明会
　東山遺跡(京北町)現地調査終了(7.22～)

9.18　赤坂今井墳丘墓現地説明会

9.21　公益法人研修会(於：大阪市)杉江昌乃主任出席

9.22　長岡京連絡協議会

9.28　吉沢城跡(弥栄町)現地調査終了(5.18～)

9.29　今井城跡・赤坂今井墳丘墓(峰山町)現地調査終了(5.24～)

9.30　故足利健亮教授追悼式(於：京都大学)、中澤圭二副理事長出席

10.1　下植野南遺跡(大山崎町)現地説明会

10.2～3　第7回京都府埋蔵文化財研究会(於：園部町)

10.5　木村英男常務理事・事務局長、市田斉当坊遺跡・森垣外遺跡(精華町)現地視察
　趙(チョ)　由典(ユジョン)韓国国立文化財研究所所長、市田斉当坊遺跡現地視察

10.7～8　全国埋蔵文化財法人連絡協議会研修会(於：守山市)米本光徳主査調査員、今村正寿主事、岡田正記主事出席

10.8　福知山城跡(福知山市)現地説明会、現地調査終了(7.27～)

10.9～10　日本考古学協会大会(於：釧路市)黒坪一樹主査調査員出席

10.14　吉沢城跡、関係者説明会

10.15　全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック研修会(於：京都市)久保哲正調査第2課主幹、岩松　保主任調査員、森下　衛・村田和弘・松尾史子各調査員出席

10.18　三山木遺跡(京田辺市)現地説明会
　京都府一般職員研修Ⅱに石崎善久調査員出席

10.19　長岡京連絡協議会調整会議(於：当

センター)小山雅人調査第１課長、奥村清一郎調査第２課課長補佐出席

10.20　国際協力事業団文化財修復整備技術コース運営委員会(於：京都市)小山雅人調査第１課長出席

全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロックＯＡ委員会(於：堺市)河野一隆、藤井　整各調査員出席

10.20　南稲葉遺跡(綾部市)現地調査開始

10.24　(財)大阪市文化財協会創立20周年記念国際講演会・学術交流会(於：大阪市)小山雅人調査第１課長出席

10.27　長岡京連絡協議会

10.28　木村英男常務理事・事務局長、三山木遺跡・内田山遺跡現地視察

三山木遺跡、現地調査終了(5.17～)

2.普及啓発活動

8.21　第86回埋蔵文化財セミナー開催(於：向日市民会館)『平成10年度京都府内発掘調査について』：小池　寛主任調査員「南山城地域初出の古墳時代中期の大集落」、柴　暁彦調査員「市田斉当坊遺跡の発掘調査」、白數真也岩滝町教育委員会文化財調査員「大風呂南墳墓群の発掘調査」

(小山雅人)

コラム～遺跡を共感する仕掛け～

近年は考古学のシンポジウムが花盛りで、少なくとも一月に２～３回はどこかで○○講演会・研究会といった名称のシンポジウムが開催されている。考古学への関心が高いのはありがたい話だし、埋蔵文化財の普及啓発に大きな働きをしていることは、ここで改めて強調するまでもない。しかし、あまりの考古学情報の氾濫に、いささか食傷気味の感を覚えるのは私だけであろうか。元来、「シンポジウム」とは、ギリシャ語の「シンポジオン」に由来し、酒を飲みながら語り合うと言った意味であったと思う。であれば、シンポジウムは楽しくなければならないはずである。

その意味で、平成11年年11月27日に行われた「むきばんだ遺跡大阪フォーラム」は、「楽しい」シンポジウムの一つであった。鳥取県妻木晩田遺跡は、鳥取県淀江町と大山町にまたがる弥生時代中期末～後期にかけての集落遺跡であるが、「むきばんだ応援団」をはじめ、全国からの多くの支援が結集し、このたび全面保存が決定した。シンポジウム会場では、歌手の李　政美さんが妻木晩田遺跡をテーマにした新曲を披露し、考古学的な検討と遺跡の保存・活用を主題とした熱心な討議が行われた。司会を担当した金関恕先生の軽妙洒脱な進行もあり、会場は終始、保存運動の先頭に立った佐古和枝さんの暖かさが伝わったように、優しい雰囲気に包まれていた。

また、(財)大阪府文化財研究センターでは現地説明会で、遺跡を対象にした寸劇を行い、好評を博している。通常の現地説明会では、個別遺構の説明を行うか、せいぜいのところ、遺跡の時代背景を説明するかである。しかし、市民にとって知りたいのは、土坑の大きさや遺物の類例がどこにあるかといったこと以上に、その遺跡に生きた私たちの祖先たちが、どのような暮らしをし、一生を送ったかである。寸劇という形式が、遺跡の本質を伝えるかは議論の分かれるところであろうが、乱立する現地説明会のマンネリ化を招かないためにも、遺跡という財産を国民と共感する「仕掛け」を工夫することが求められているのではなかろうか。

「考古学をやさしくしよう」・「考古学を楽しくしよう」。当調査研究センター理事の佐原　眞氏の言葉である。しかし、それに私たちはどれだけ応えたであろうか。「最古・最大」が乱立する新聞記事だけでは、遺跡は研究者とマスコミのものになってしまう。遺跡を共感する「仕掛け」を工夫することが、ますます重要になってくるのではなかろうか。

(河野一隆)

受贈図書一覧(11. 5～7)

(財)北海道埋蔵文化財センター
調査年報11　平成10年度、白滝遺跡群を掘るⅡ、同Ⅲ、(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書第130集　中野B遺跡、同第131集　富野3遺跡、同第132集　ユカンボシE7遺跡、同第133集　ユカンボシC15遺跡、同第134集　キウス4遺跡(3)、同第135集　キウス4遺跡(4)、同第136集　キウス5遺跡(7)・キウス7遺跡(6)

釧路市埋蔵文化財調査センター
釧路市幣舞遺跡調査報告書Ⅳ

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第283集　細田遺跡発掘調査報告書、同第184集　長渡遺跡・小長根Ⅱ遺跡発掘調査報告書、同第285集　花立Ⅰ遺跡・衣関遺跡発掘調査報告書、同第286集　萱中Ⅲ遺跡発掘調査報告書、同第287集　房の沢Ⅳ遺跡、同第288集　尿前Ⅱ遺跡A地区発掘調査報告書、同第289集　オミ坂遺跡発掘調査報告書、同第290集　大鳥Ⅰ遺跡発掘調査報告書、同第291集　峠山牧場Ⅰ遺跡A地区発掘調査報告書、同第292集　耳取Ⅰ遺跡B地区発掘調査報告書、同第293集　熊堂B遺跡第5次・台太郎遺跡第16次発掘調査報告書、同第294集　野沢Ⅳ遺跡発掘調査報告書、同第295集　芦名沢Ⅰ遺跡発掘調査報告書、同第296集　長谷堂貝塚発掘調査報告書、同第297集　下舘銅屋遺跡発掘調査報告書、同第298集　北野Ⅳ遺跡発掘調査報告書、同第299集　小平Ⅰ遺跡発掘調査報告書、同第300集　上尾田の館跡発掘調査報告書、同第301集　大平遺跡発掘調査報告書、同第302集　庫理遺跡発掘調査報告書、同第303集　横間Ⅱ遺跡・谷地田Ⅰ遺跡・有矢野遺跡・有矢野館跡発掘調査報告書、同第304集　芋田Ⅱ遺跡発掘調査報告書、同第305集　板子沢遺跡発掘調査報告書、同第306集　大芦Ⅰ遺跡発掘調査報告書、同第307集　南田Ⅰ遺跡発掘調査報告書、同第308集　本宮熊堂B遺跡第4次・鬼柳A遺跡第4次発掘調査報告書、同第309集　台太郎遺跡第15次発掘調査報告書、同第310集　山口館跡発掘調査報告書、同第311集　岩手県埋蔵文化財発掘調査略報

(財)茨城県教育財団
年報18、研究ノート8号

(財)ひたちなか市文化・スポーツ振興公社文化財調査事務所
(財)ひたちなか市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告第17集　武田石高遺跡

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第204集　白川傘松遺跡、同第229集　下小鳥神戸遺跡、同第250集　下芝五反田遺跡

(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第206集　外東／神田天神後／大久保条里、同第207集　末野遺跡Ⅱ、同第208集　根際遺跡、同第209集　妙音寺／妙音寺洞穴、同第210集　宮地墓地遺跡、同第211集　城見上／末野川／花園城跡／箱石、同第212集　大道東遺跡、同第213集　下向沢／中原、同第214集　宿北Ⅴ遺跡、同第215集　膳棚東遺跡、同第216集　下ノ台遺跡、同第217集　岡部条里／戸森南、同第218集　戸崎前／薬師堂根Ⅱ、同第219集　八ッ島遺跡、同第220集　在家遺跡、同第221集　要害山城跡、同第222集　私市城武家屋敷跡、同第223集　御林下遺跡、同第224集　西富田・四方田条里遺跡、同第225集　折原石道遺跡、同第226集　宮ノ後遺跡、同第227集　白鍬宮腰遺跡、同第228集　中里前原遺跡、同第229集　小村田西／小村田／関東、同第230集　馬場浦遺跡、同第231集　沖田Ⅰ／沖田Ⅱ／沖田Ⅲ、同第232集　菖蒲城跡、研究紀要第15号、年報19

(財)千葉県文化財センター
研究連絡誌第53、同54号、千葉県文化財センター調査報告第375集　成東町嶋戸東遺跡第2次発掘調査報告書

(財)印旛郡市文化財センター
(財)印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第132集　松山2号墳、同第136集　宮内井戸作遺跡Ⅰ地区、同第138集　稲荷谷津遺跡・狐谷津遺跡・木戸遺跡・郷山遺跡・塚越遺跡・谷津台遺跡、同第142集　南囲護台遺跡、同第145集　南羽鳥遺跡群Ⅲ、同第147集　西村邸屋敷跡遺跡、同第152集　川栗遺跡群Ⅰ、年報11～14

(財)香取郡市文化財センター
(財)香取郡市文化財センター調査報告書第58集　伊地山遺跡、同第59集　後田遺跡、同第60集　栗山川流域遺跡群・島ノ間遺跡、同第61集　杉内遺跡、同第62集　浅間1号墳・植房宮作遺跡、同第64集　古屋敷遺跡、事業報告Ⅷ

(財)東総文化財センター
(財)東総文化財センター発掘調査報告書第19集　堀川館跡、年報4　平成9年度

(財)東京都生涯学習文化財団東京都埋蔵文化財センター
東京都埋蔵文化財センター調査報告第68集　多摩ニュータウン遺跡、同第72集　多摩ニュータウン遺跡、同第74集　多摩ニュータウン遺跡、年報19

(財)かながわ考古学財団
かながわ考古学財団調査報告38　吉岡遺跡群Ⅴ、池子遺跡群　総集編

(財)横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター
年報9

(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
年報　平成10年度、新潟県埋蔵文化財調査報告書第91集　牛道遺跡、同第92集　金塚遺跡・三仏生遺跡・割目A遺跡、同第93集　和泉A遺跡、同第94集　国道18号上新バイパス関係発掘調査報告書Ⅳ

富山県埋蔵文化財センター
年報　平成9年度、花ひらく縄文文化

(財)岐阜県文化財保護センター
岐阜県文化財保護センター調査報告書第23集　西ヶ洞遺跡・西ヶ洞古墳群

各務原市埋蔵文化財調査センター
各務原市文化財調査報告書第26号　蘇原東山遺跡群発掘調査報告書

能登川町埋蔵文化財センター
能登川町埋蔵文化財調査報告書第46集　斗西遺跡・鍛冶屋遺跡、同第47集　法堂寺廃寺跡、同第48集　長福寺遺跡・石田遺跡・法堂寺遺跡・横田遺跡

(財)大阪府文化財調査研究センター
箕面北部丘陵地区埋蔵文化財発掘調査報告書、池島・福万寺遺跡発掘調査概要ＸＸⅢ、久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅱ、(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書第32集　東奈良遺跡、同第36集　小畑遺跡、同第39集　中之杜遺跡他発掘調査報告書、同第42集　吹田操車場遺跡、同第43集　田須谷古墳群、大阪文化財研究　第15号、第39回大阪府埋蔵文化財研究会資料集

(財)八尾市文化財調査研究会
(財)八尾市文化財調査研究会報告62、同63、平成10年度　事業報告

(財)枚方市文化財研究調査会
枚方市文化財年報20

(財)桜井市文化財協会
1995年度発掘調査報告書１

島根県埋蔵文化財調査センター
年報Ⅶ、姫原西遺跡、蔵小路西遺跡２、蔵小路西遺跡３、渡橋沖遺跡、三田谷Ⅰ遺跡、古志本郷遺跡Ⅰ、上塩冶横穴墓群第28支群、中原遺跡、西川津遺跡Ⅵ

(財)徳島県埋蔵文化財センター
徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第22集　ウエノ遺跡、真朱　第３号、年報　Vol.７～９

(財) 愛媛県埋蔵文化財調査センター
埋蔵文化財発掘調査報告書第75集　井門Ⅰ遺跡・井門Ⅱ遺跡、愛比売　平成７～10年度年報

(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
松山市文化財調査報告書第66集　小野川流域の遺跡、同第68集　松山大学構内遺跡Ⅲ、同第69集　瀬戸風峠遺跡、同第70集　船ヶ谷遺跡、同第72集　乃万の裏遺跡、同第73集　船が谷遺跡、年報11、魂のゆくえ

(財)北九州市教育文化事業団
北九州市埋蔵文化財調査報告書第223集　金山遺跡Ⅰ・Ⅴ区、同第224集　金山遺跡Ⅲ区、同第225集　片伊田遺跡４、同第226集　峠遺跡２、同第227集　片伊田遺跡５、同第228集　小倉城御蔵跡、同第229集　常盤橋西勢溜り跡、同第230集　重留遺跡第２地、同第231集　永犬丸遺跡群３、同第232集　園田浦城跡、同第233集光照寺遺跡１、同第234集　光照寺遺跡２、同第235集　長野角屋敷遺跡、同第236集　御座遺跡群、同第237集　御座遺跡群、同第238集　中貫遺跡、年報15　平成９年度、研究紀要　第13号

小郡市埋蔵文化財調査センター
干潟向畦ヶ浦遺跡　小郡市文化財調査報告書第119集、大板井遺跡ＸⅣ　同第132集、大板井遺跡ＸＶ　同第133集、市内遺跡等分布調査　同第134集、大保龍頭遺跡２　同第135集、大崎小園遺跡３　同第136集、大保横枕遺跡　同第137集、寺福童七斗前遺跡　同第138集、小板井屋敷遺跡同第139集、大保龍頭遺跡１　同第140集

白老町教育委員会
虎杖浜２・ポンアヨロ４遺跡

仙台市教育委員会
仙台市文化財調査報告第225集　南小泉遺跡、同第230集　柳生台畑遺跡、同第234集　郡山遺跡ＸⅨ、同第234集　富沢遺跡、同第236集　後河原遺跡、同第238集　陸奥国分尼寺跡ほか発掘調査報告書、同第239集　平成10年度年報20

米沢市教育委員会
米沢市埋蔵文化財調査報告書第62集　大樽遺跡、同第63集　上谷地Ｄ遺跡、同第64集　丸山日陰館跡、同第65集　遺跡詳細分布調査報告書第12集

日野市教育委員会
日野市埋蔵文化財発掘調査報告61　日野市埋蔵文化財発掘調査輯報ＸⅠ、同63　七ツ塚遺跡４、同64　七ツ塚遺跡５

神奈川県教育委員会
神奈川県埋蔵文化財調査報告41

小田原市教育委員会
小田原市文化財調査報告書第68集　史跡小田原城跡銅門復原工事報告書、同第69集　千代仲ノ町遺跡第Ⅳ地点、同第70集　中宿町遺跡第Ⅲ地点、同第71集　欄干橋町遺跡第Ⅴ地点、同第72集　大久保雅楽介邸跡第Ⅴ地点、同第73集　小田原市緊急発掘調査報告書４、同第74集　小田原市緊急発掘調査報告書５、同第75集　服部孝太郎邸跡第Ⅰ地点

境川村教育委員会
境川村埋蔵文化財調査報告書第15輯　金山遺跡第４次・立石北遺跡第２次・京原遺跡第３次・一の沢遺跡第９次

上田市教育委員会
上田市文化財報告書第72集　上沖(大沢)遺跡、同第73集　西之手遺跡、同第74集　八幡裏遺跡Ⅳ、同第75集　蒲田Ｂ遺跡、同第76集　駕籠田(築地)遺跡、同第77集　八幡裏遺跡Ⅴ、同第78集　銀杏木・宮原遺跡、同第79集　高田遺跡Ⅲ、同第80集　平成10年度市内遺跡

新津市教育委員会
中谷内遺跡発掘調査報告書

小杉町教育委員会
ＨＳ－04遺跡発掘調査報告、小杉町埋蔵文化財発掘調査一覧　1997年度、同1998年度

高岡市教育委員会
高岡市埋蔵文化財調査報告第２冊　院内東横穴墓調査報告、同第３冊　江道横穴墓群調査報告、高岡市埋蔵文化財調査概報第38冊　市内遺跡調査概報Ⅶ、同第39冊　市内遺跡調査概報Ⅷ、同第40冊　高岡市埋蔵文化財分布調査概報Ⅸ、同第41冊　市内遺跡調査概報Ⅸ、同第42冊　高岡市埋蔵文化財分布調査概報Ⅹ、同第43冊　石塚遺跡調査概報Ⅴ、同第44冊　国吉・石堤地区の遺跡調査概報

婦中町教育委員会
県営公害防除特別土地改良事業に係る埋蔵文化

財包蔵地試掘調査報告

下村教育委員会

下村加茂遺跡発掘調査報告

多治見市教育委員会

多治見市文化財保護センター研究紀要第５号、酒井ヶ峯１・２号窯発掘調査報告書　多治見市埋蔵文化財発掘調査報告書第60号

静岡市教育委員会

登呂遺跡を見つめて、静岡市埋蔵文化財調査報告36　駿府城跡Ⅰ、大御所徳川家康の城と町、ふちゅ～るNo.７

菊川町教育委員会

菊川町埋蔵文化財調査報告書第53集　白岩遺跡Ａ、同第58集　白岩遺跡

安濃町教育委員会

安濃町埋蔵文化財調査報告13　西相野遺跡・ツヅミ遺跡発掘調査報告書

藤井寺市教育委員会

藤井寺市文化財報告第19集　石川流域遺跡群発掘調査報告ⅩⅣ

寝屋川市教育委員会

石宝殿古墳、長保寺遺跡、池田西遺跡、失われた古代の港、わが国最古の牧、石宝殿の謎に迫る、高宮八丁遺跡、高柳遺跡、高宮八丁遺跡Ⅱ、中神田遺跡Ⅱ、茨田堤と茨田屯倉

富田林市教育委員会

平成10年度　富田林市内遺跡群発掘調査報告書

羽曳野市教育委員会

史跡峯ヶ塚古墳予備調査報告、羽曳野市埋蔵文化財調査報告書23　羽曳野市内遺跡調査報告書、同23　史跡峯ヶ塚古墳　平成２年度発掘調査概報、同27　羽曳野市内遺跡調査報告書、同28　史跡峯ヶ塚古墳後円部墳丘調査概要、同36　羽曳野市内遺跡調査報告書、同37　古市遺跡群ⅩⅩ、株山遺跡発掘調査報告書

貝塚市教育委員会

あきこちゃんの大冒険

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

兵庫県文化財調査報告書第138冊　宮脇遺跡、同第159冊　中原遺跡他発掘調査報告書、同第165冊　美乃利遺跡、同第177冊　禿山遺跡他発掘調査報告書、同第179冊　南本町遺跡、同第181冊　塩淵３号墳、同第182冊　南畑町遺跡（Ⅱ）、同第183冊　清水遺跡、同第187冊　高畑町遺跡（Ⅰ）、同第188冊　安倉南遺跡、同第189冊　屋敷町遺跡

三田市教育委員会

三田焼の研究、三田市文化財報告書第14冊　三輪・宮ノ越遺跡、同第15冊　上井沢土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査の記録

太子町教育委員会

播磨国鵤荘現況調査報告Ⅵ、龍野市文化財調査報告９　播磨国鵤荘現況調査報告Ⅴ

五色町教育委員会

ごしきの遺跡

倉吉市教育委員会

倉吉市文化財調査報告書第97集　倉吉市内遺跡分布調査報告書、同第98集　上神宮ノ前遺跡発掘調査報告書、同第99集　駄道東遺跡発掘調査報告書、同第100集　史跡大原廃寺発掘調査報告書、同第101集　奥小山８号墳発掘調査報告書

岡山県教育委員会

岡山県埋蔵文化財報告90

総社市教育委員会

総社市埋蔵文化財発掘調査報告15　奥坂遺跡群

勝央町教育委員会

勝央町文化財調査報告４　福吉丸山遺跡

府中市教育委員会

府中市内遺跡４

美東町教育委員会

美東町文化財調査報告第８集　長登銅山跡Ⅲ

志度町教育委員会

花池尻遺跡、寺尾古墳群

松野町教育委員会

松野町文化財調査報告第９集　河後森城跡

北九州市教育委員会

北九州市文化財調査報告書第81集　釜蓋遺跡第２地点、同第82集　牧山古墳群、同第83集　田原遺跡、同第84集　木屋瀬宿西構口、同第85集　小倉城跡Ⅴ、同第86集　横代中津町遺跡・カキ遺跡、同第87集　京町遺跡、北九州市埋蔵文化財分布地図（小倉南区）、（小倉北区・門司区・離島）、（若松区・戸畑区・八幡東区）

大野城市教育委員会

大野城市の文化財　第31集、大野城市文化財調査報告書第54集　中・寺尾遺跡Ⅲ、同第55集　森岡遺跡Ⅱ、同第56集　石勺遺跡Ⅳ

新吉富村教育委員会

新吉富村文化財調査報告書第12集　垂水廃寺Ⅱ・宇野地区遺跡群Ⅰ

佐賀市教育委員会

佐賀市文化財調査報告書第98集　上和泉遺跡11区・13区、同第99集　東淵遺跡１区、同第100集　江頭遺跡９区・森田遺跡１区、同第101集　ウー屋敷遺跡、同第102集　牟田寄遺跡Ⅶ、同第103集　長瀬一本杉遺跡・高木城跡、同第104集　江頭遺跡、同第105集　坪の上遺跡Ⅱ、同第106集　徳永遺跡９区、同第107集　上和泉遺跡６区

唐津市教育委員会

唐津市文化財調査報告書第84集　唐津市内遺跡確認調査、同第85集　菅牟田西山遺跡、同第86集　竹木場丹ノ木遺跡、同第87集　菜畑内田遺跡

玄海町教育委員会

玄海町文化財調査報告書第６集　藤田家文書目録、同第７集　峯家文書目録

熊本市教育委員会

池辺寺跡Ⅱ、熊本市埋蔵文化財発掘調査報告書平成10年度、熊本市埋蔵文化財調査年報第２号

千歳村教育委員会

千歳村文化財調査報告第３集　大迫岩ノ下遺跡、五郎丸遺跡、原田第２遺跡原地区

平賀町郷土資料館

平賀町埋蔵文化財報告書第24集　大光寺新城跡遺跡

福島県立博物館

福島県立博物館調査報告書第21集　田島町上ノ台遺跡発掘調査報告書

土浦市立博物館

紀要　第９号

栃木県立博物館

麻－大いなる繊維－、研究紀要　第16号
栃木県立なす風土記の丘資料館
栃木の遺跡
群馬県立歴史博物館
観音山古墳と東アジア世界
国立歴史民俗博物館
研究報告　第80～82集
千葉市立加曽利貝塚博物館
紀要　第26号、貝層の研究Ⅰ
大田区立郷土博物館
麦わら細工の輝き、よみがえる大田区の風景
出光美術館
館報　第107号
塩尻市立平出博物館
平出博物館ノート13、紀要　第16集、北原遺跡
高岡市立博物館
年報　第13号
氷見市立博物館
戦国・氷見、年報　第17号
石川県立歴史博物館
城下町金沢の人々
静岡市立登呂博物館
竜爪山の歴史と民俗、館報　第９号、登呂の弥生人７
名古屋市見晴台考古資料館
見晴台教室'98、年報16、研究紀要　第１号、よみがえる環濠集落、見晴台遺跡第34・36・37・38次発掘調査の記録、津賀田古墳発掘調査概要報告書、名古屋城三の丸遺跡第10次、竪三蔵遺跡第14次、高蔵遺跡第20次、平田城跡第２次、旧紫川遺跡第７次、朝日遺跡第３・４次、千音寺遺跡、東邦ガス工事に伴う埋蔵文化財調査報告、名古屋市文化財調査報告40　三王山遺跡、同42　鳴海城跡
豊田市郷土資料館
豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第９集　梅坪遺跡Ⅴ、同第10集　南山畑遺跡、同第11集　梅坪遺跡Ⅵ
一宮市博物館
一宮の文化財めぐり、音聴への誘い、平野のムラに暮らす、尾張の民具
滋賀県立琵琶湖博物館
湖の船
大阪府立弥生文化博物館
要覧　平成10年度、仙界伝説
大東市立歴史民俗資料館
大東市埋蔵文化財調査報告第15集　御領遺跡
八尾市立歴史民俗資料館
融通念仏行者
吹田市立博物館
江戸時代の吹田
池田市立歴史民俗資料館
古代国家胎動
太子町立竹内街道歴史資料館
記紀の道
神戸市立博物館
館臓品目録　美術の部15、同考古・歴史の部15、研究紀要　第15号、年報No.14
西宮市立郷土資料館
学校探検
播磨町郷土資料館
播磨町の文化財
奈良国立文化財研究所飛鳥資料館
鏡を作る
島根県立八雲立つ風土記の丘資料館
海－海流に乗った古代の恋物語－、古代の技術を考える
倉敷考古館
里木貝塚
下関市立考古博物館
弥生の装い
徳島県立博物館
年報　第８号
北九州市立考古博物館
年報　平成10年度、研究紀要　Vol.６
熊本市立熊本博物館
館報No.11
大分県立歴史博物館
大分県立歴史博物館報告第２集　六郷山寺院遺構確認調査報告書Ⅶ、年報　平成10年度、宇佐歴史民俗資料館年報　平成９年度

東北学院大学東北文化研究所
紀要　第31号
早稲田大学本庄校地文化財調査室
大久保遺跡Ⅴ、同Ⅶ
日本大学史学会
史叢　第60号

都立学校遺跡調査会
富士見台Ⅲ、本郷元町Ⅲ、日影町Ⅱ
武蔵国分寺関連遺跡調査会
武蔵国分寺南西地区発掘調査報告
四ツ谷前地区小峯ビル遺跡調査団
四ツ谷前遺跡
文京区遺跡調査会
文京区埋蔵文化財調査報告第９集　諏訪町遺跡、同第12集　上富士前町遺跡第Ⅱ地点
国立国会図書館
日本全国書誌　第32、34、35号
(株)西東社
日本の古墳・古代遺跡
玉川文化財研究所
宿根西遺跡
木曽広域連合事務局
越遺跡
全国天領ゼミナール事務局
第14回全国天領ゼミナール記録集
(財)古代學協會
古代文化　第51巻第７～９号
(財)泉屋博古館
紀要　第16巻、文人画展
狭山池調査事務所
狭山池　論考編・平成８～10年度調査報告書
羽曳野市遺跡調査会
鷹高鷲中之島遺跡調査報告書、野々上Ⅱ－平成６年度－、野々上Ⅱ－野中寺古瓦譜－、野々上Ⅲ、野々上Ⅳ、野々上Ⅴ、野々上Ⅵ、平成８年度　市営車地住宅埋蔵文化財発掘調査報告書、翠鳥園遺跡発掘調査報告書Ⅰ、同Ⅱ、誉田白鳥遺跡発掘調査報告書、阿弥陀廃寺跡、栄町、文化財保護のてびき

郵政考古学会
郵政考古紀要　第26冊、同第27冊
豊岡市出土文化財管理センター
豊岡市文化財調査報告書第27集・豊岡市立郷土資料館調査報告書第27集　立石山崎古墳群、同第28集・同第28集　福成寺出土銭、同第29集・同第29集　加陽土屋ヶ鼻遺跡群、同第30集・同第30集　森尾大内谷古墳群、とよおか発掘情報第１号
奈良国立文化財研究所
飛鳥藤原のみやこ、飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅳ、トイレ遺構の総合的研究、岩手県足沢遺跡資料、平城京左京七条一坊十五・十六坪発掘調査報告書
奈良県立橿原考古学研究所
大和を掘る17
興福寺
興福寺
博物館等建設推進九州会議・編集委員会
Museym kyushu　通巻64号

(財)京都市埋蔵文化財研究所
第５回近畿ブロック埋蔵文化財研修会資料集
京都市文化市民局
京都市の文化財(第17集)
長岡京市教育委員会
長岡京市文化財調査報告書　第39冊
加茂町教育委員会
加茂町文化財調査報告第16集　恭仁宮(京)跡発掘調査概要
加悦町古墳公園はにわ資料館
白米山古墳Ⅲ・須代遺跡Ⅳ　加悦町文化財調査報告第28集、金屋遺跡　同第29集、徹底検証Ⅱ巨大古墳への胎動、丹後の古代中世社会を探るⅡ
園部文化博物館
鉄道への旅
亀岡市文化資料館
原始・古代人のわすれもの、火を使う人々
宇治市歴史資料館
「白川金色院」と恵心院、笠取地域の古文書、許波多、宇治市埋蔵文化財発掘調査概報第33集西隼上り遺跡発掘調査概報、同第40集　若林遺跡発掘調査概報、同第43集　白川金色院跡・平等院旧境内遺跡、同第44集　宇治市街遺跡発掘調査概報
城陽市歴史民俗資料館
山－クヌギくんの里山たんさく－
佛教大学
文学部論集　第83号
龍谷大学学術文化局考古学研究会
小金岐古墳群分布及び測量調査報告書
丹波史談会
丹波　創刊号

石部正志
峰考古　第９号
稲垣晋也
中国古代瓦当拓本集撰
大野左千夫
謎の古代豪族紀氏、和歌山市立博物館　研究紀要14
奥村清一郎
第２回　京都府埋蔵文化財研究会発表資料集、第３回　京都府埋蔵文化財研究会発表資料集
河野一隆
古代東アジアの鉄と倭、同第７回、渡来人の受容と展開
田口鹿一
濁り池須恵器窯址
野島　永
出雲国風土記
福永伸哉
古墳時代政治史の考古学的研究
山本祐作
東播磨　第６号

編集後記

情報74号が完成しましたので、お届けします。

古代の道路特集となった第73号から一転、今号は京都府北部の遺跡・遺物を取り上げた力作が寄せられました。いずれも分析・論理展開ともしっかりしたものであり、「丹後王国」一辺倒であった京都府北部の遺跡の評価を、新しい視角から照射したものです。ぜひ、じっくりとご味読下さい。次号は2000年代最初の『情報』です。新しい年が、読者の皆様にとっても良い年になりますよう。

（編集担当＝河野一隆）

京都府埋蔵文化財情報 第74号

平成11年12月26日

発行　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒617-0002　向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075)933-3877 (代)　Fax 075-922-1189(代)

印刷　三星商事印刷株式会社
〒604-0093　京都市中京区新町通竹屋町下ル
Tel (075)256-0961 (代)